
時間が狂い出してから、俺の常識が壊れ始めました。

よみよみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時間が狂い出してから、俺の常識が壊れ始めました。

【Nコード】

N4985Z

【作者名】

よみよみ

【あらすじ】

高校の入学式の次の日、愛田千秋に届いた一通のメール。それが全ての始まりだった。メールは宛先が不明で内容は、『踏ませるな、助ける』全く訳が分からない、メールだったが。千秋は、そのメールの重要度を次の日？ になってから気づくのであった。ルーブ！？ タイムトラベル！？ 超能力！？ とにかく常識は4月6日に覆された！！

第1話 一通のメール（前書き）

この作品はフィクションです。実際の人物・団体・事件などには一切関係ありません。

第1話 一通のメール

4月6日のこと……

俺の睡眠を邪魔したのは、いつもの目覚まし時計のうるさいアラームでは無く、一つメールの着信だった。

枕元で、これでもかと振動してバイブ音を撒き散らしながら自己主張をする、人類の英知の結晶。

「あーうるさいな」誰だよ」こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

そのバイブ音によって半覚醒状態の俺は、重い瞼を少し開ける。部屋のカーテンの隙間から暖かそうな日の光が指しこんでいることから推測するに残念ながらも朝みたいだ。

携帯を開けて液晶画面に目をやると、6時58分をデジタル表示がとても分かりやすく教えてくれた。いつも起きるのは7時ジャスト。もう2度寝をしている暇は無い。俺は一つのため息を漏らしながら、メールボックスを開く。

携帯の画面には、新着メール1件。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

はつきり言おう。訳が分からない。俺の睡眠時間2分を返せ——
ジリジリジリジリ！

「うるさい——」
バン！

「あー今日は、ついて無い1日になりそうだ」
眠たい眼を右手の指で擦りながら、ため息混じりに呟いた。

朝の登校。

俺は通い慣れない道を自転車で走っている。確かにまだまだ新鮮さがある道だ。昨日が入学式だったのだから、当然の事だろう。中学時代の通学に比べて、風を切る感覚が気持ちが良いと感じるのは、新生活のスタートと言う出来事が加担しているのかもしれない。

だが、俺は余り新生活に期待はしないように心がけている。本来なら、もっと新生活らしくウキウキとしていたほうが良いのかもしれないが、変に期待すると、あとでの理想のギャップに耐えられない可能性もある。実際、中学の時もそんな事があつたし、妙な期待は、しない方がいいだろう。俺は、同じ轍を二度も踏みたくはない。とはいえ、俺だって、全く期待していないのは、嘘になる。そりゃ高校生だし、彼女の1人でも作りたいなんて思っているのは此処だけ話だ。つまり俺は、何処にでもいる普通の高校生で在り、高校生らしい普通の日常をエンジョイする、そんなつもりだが、少し気になるのが朝のメールだ。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミツシヨン。『踏ませるな、助ける』

何だ、この訳のわからない文章は？ 新手のチェインメールだろうか？ それとも俺の悪友か誰かの悪戯だろうか？ 俺は頭の中で自分の身の回りに居る容疑者の顔を思い浮かべた。だとすると、一番怪しいのは――

俺がこれから順調に行けば3年間はお世話になるであろう学び舎に着き、自転車小屋へ我が愛車、まだ新車でピカピカの19800円。命名『ギキユツパ』を駐車していると、校門の方から馬鹿のように、いや間違った、馬鹿な容疑者第1号が大手を振ってこちらへ向かって自転車を漕いで来る。

「よっおおー！ 愛ちゃん」

殴りたくなる笑顔で自転車を漕いでこちらへ向かって来る悪友に、
どうやら俺もそれなりの誠意を見せなきゃいけないか。

タタタッタ！ タタタッタ！

俺は、馬鹿に向かつて、走って行き、右腕で朝の挨拶のラリアットを食らわしてやった。

「グットモーニング！」

「ごふうっ！」

自転車から倒れ込み、その場に転倒する馬鹿。

馬鹿と呼ばれる者は、色々な種類がある。大雑把に区別をすると、『勉強が出来ない馬鹿』、『行動、言動が煩い、ム力つく、めんどくさい馬鹿』に分けられる。自分で言うのもなんだが、俺は前者の馬鹿だ。だが後者やよりは大分マシだろう。目の前に倒れている馬鹿は間違いなく後者だ。

「痛ててて」

俺は、ソイツを見降ろしながら、

「おい、そのあだ名で呼ぶなど、何度言ったら分かる？ 佐伯 利さえき とし

一俺の名前は、愛田あいだ 千秋ちあきだと、あと何回言えば、その頭で理解出来る？ 中学三年間でお前は、何を学んできた？」

親指を立て利一は、

「お前の好きなものからスリーサイズまで覚えて来たぜ」

「……楽に逝けると思うなよ」

俺がコイツにいつものノリで殴ろうとした時、俺達の目の前に新調したばかりだろう綺麗な制服を着こなし分厚い黒い本を持って、微笑んでいる腰上位まである長髪的女子生徒の姿が――

かつ、かわい――

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクス共」

「……………」

「……………」

時が止まった気がした。

俺達に女子とは思えない言葉を吐き捨てると昇降口へと消えて行った。

第2話 1 - 3

「通行の邪魔よ、消え失せなさい、ゴミクズ共」

「……、」

「……、」

時が止まったきがした。あんな言葉を女子に吐かれたのは、生まれて初めての体験だったと思う。

そう俺達に言い放つと、その女子は昇降口へと消えて行った。

「……お、おい、千秋」

その女子が立ち去った後、利一は俺に驚いた顔をして、
「何だ、馬鹿」

「高校つて怖いーな」

確かに怖かった恐怖を覚えたが、そんな事よりも俺は、
「そうだな、だか俺はお前のほうが、ある意味怖いよ」

「それって、どう意味だ？」

コレは確信犯のセリフだ。

コイツと話するのは、やけに疲れるから、俺は利一を置いて、早足で昇降口へと向かう。

「おい、待てよ」

急いで自転車を置いて、俺の後を付けて来る、利一。

「それにしても、奇跡だな、また千秋と、一緒の学校になれるなんて、やっぱ、神様は、居るな」

何をしらじらしい。お前が俺の受ける高校を調べて、同じところを受けたんだろうが！ 滑り止めまで、同じところ受けやがって。こんな奴が、俺よりも数倍頭が良いと思うと、人間はつくづく平等でないと感じてしまう。

「おい、利一」

「ん？」

俺の言葉に反応し下駄箱から上履きを取り出した利一は首をこちらに向けた。

「明日学校来ても、お前の上履き無いからな」

俺は、コイツは、虐め宣言をした筈だが、

「何だよ俺の上履きが欲しいなら、今やるよ」

利一は、下駄箱から取り出した上履きを俺に向ける。

コイツは、どんだけポジティブなんだ？ このポジティブを日本全国民が持つていれば、自殺なんてモノは、この国に無くなるかもしれないな。

「おお、そうか——」

俺はまだ白く汚れない、上履きを受け取り、

「利一、今何時だ？」

利一は何も見ず、素早く、

「今、8時26分36秒を回ったところだけど」

時刻を答える。何も見ずに。

「あと、3分弱かホールームが始まるのは——」

「おらああ！」

ブンッ

昇降口の外へと上履きを投げ捨てた。上履きは、華麗な孤を描き学校の柵を越えて行った。勿論人の気の無い所へと投げた、こんなくだらないことに誰かに迷惑はかけたくないから。

そのあと俺は自分の教室を目指し、前を向き歩きながら我が悪友に背中を見せ右手を頭上へと持って行き手を左右に振る。

「じゃあな、高校始まって、そうそう、遅刻するなよ親友」

何か後ろで、ぎゃーぎゃー言っていたが、俺はそれをスルーし。

何事もなかったように、スタスタと歩く。背後から駆けだす足音が

聞こえて、小さくなっていったのは利一のものだろう。

そして、俺が自分の教室、1 - 3に入ると、いかにも始まった感じの初々しさ溢れる光景が広がっている。話しをしている者、席に座って静かにしている者、音楽を聞いている者、本を読んでいる者、様々だ。まだ、慣れていというか、居心地の変な空間。中1の時や、クラス別けをした時を思い出すな。

げえっ！

俺は自分の席。まだ名前の順なので、黒板を前にして右端の1番前の机へと座ると、先程俺と利一に毒舌を吐いた女子生徒が、俺のすぐ後の席で静かに、本を読んでいた。

普通にしていれば、可愛いんだがな……アイツには、関わらないようにしよう。

それから、1分程経つと、教室に担任の男生教諭が入って来て、軽く挨拶をし、

「それじゃあ、まず、出席を取ります、まず、愛田——」

その時、点呼の声をかき消すかのように、教室の前のドアが開いた。

ガラ——！

「はあ、はあ、はあ、はあッ、いきなり、遅刻してスイマセン——」

ドアを開けるやいなや、俺のすぐ右で、大きくお辞儀をする息を切らした男子生徒が。見覚えのある頭、聞き覚えのある声。

何故お前がここに来る利一？ お前の教室は、隣の4組だろうが！

頭を上げた、馬鹿と、俺は目が在ってしまった。

「アリヤ？　なんで千秋が此処に？」

他人のフリ、他人のフリ、他人のフリ。

「君、何処のクラスだい？　ここのクラスは、全員そろっているんだが？」

担任が、馬鹿に問う。確かに座席には、もう空席は無い。つまり

この空間にお前の居場所はない。速やかに在るべきところへ帰れ。

「え？ 此処は、4組じゃ……」

一歩さがり、ドアの上にあるクラスプレートを見る利一。

「あつ、失礼しましたー！！」

そう言つて、ドアを閉めて、左の4組の方向へ消えていく利一のシルエットが、教室のドアの上にある長方形の曇りガラスに写った。そして1―3我がクラス内は、クスクスと笑いに包まれた。

はあゝアイツと友達だと、知られたくない。無理だと思うが。

第3話 絶滅危惧種

そして、学校が普通に始まって1日目という事もあり、これと言って授業らしい授業もせず。あつという間に、4時間が過ぎて、昼食の時間がやって来た。

今日のところは、母親に作って貰った弁当を持って来た、学校の売店というのを使ってみたかったが、どういうモノか分からないので、今日のところは無難に弁当を持ってきた。あの高校お約束の授業が購買のパンを懸けた戦いは果たして実在しているのだろうか、ただのフィクションかそれともノンフィクションか今度確かめてみよう。

教室を見渡すと、早くも数人のグループを作って、机をくっ付け、食べようとしている者達も居るが、大多数の人は、自分の座席で、一人飯。1日目じゃあ、まあ、こんなものだろう。

俺が弁当を鞆から取り出した時、教室のドアが開らき、朝のリップレイのように、また、利一がやって来た。

「ちあきー！一緒に弁当食おうぜー！！」

少しざわついていた、教室が一瞬で静まりかえった。まだまだ他人行儀が横行している教室でコイツの行動、言動は場違いだからだ。

.....

嫌な間と空気を作りやがって、仕方ない。

俺は右の手のひらを額にやり、はあゝと大きなため息をついて弁当を持って席を立ち、利一の居るドアへ歩いて行き、静かにドアを閉め廊下に出た。

「千秋、一緒に飯食お——」

俺は、笑顔の利一の頭を掴んで、教室の壁へと、側頭部を叩きつけた。

ドガァ！

「あああ！脳細胞が死んだあー」

相変わらずリアクションの大きい奴だ。

「良かったじゃないか、俺はお前を殺すつもりだったのに、脳細胞だけで済んで、一生分の奇跡を使い果たしたな、利一」

「仏壇には、千秋と、ツーショットの遺影を――」

ドオガア！！

「何か言ったか？」

利一は、流石に2発目のウォールアタックが堪えたのか、かすめるような声で、

「いいえ、すいません」

「で、飯は、何処で食った？」

「千秋、俺と一緒に昼飯を食ってくれるのか？」

「勘違い、するなよ、この状況で、教室に戻りたくないだけだ」

変な空気になってしまった、教室にわざわざ戻りたくは無い。もうコイツと俺の交友関係はきつとクラスの連中に残念ながら知られてしまっている事だろう。

俺がそんな事を嘆いていると。

「この、ツンデレめー」

と、言いながら、俺の頬に人差し指を押し当てやがった。

怒。怒。怒。

負の感情がヒートアップ。今までのコイツの行いおこなできつと、ベスト5にはランクインしそうな、行動だ。

ドガ！ バキ！ ドン！ バシ！ グギ！

「ぐぎやああああ」

残酷過ぎて、描写出来ません。擬音語と、利一の悲鳴だけで、イメージして下さい。

「行くぞ」

鼻から、赤い体液を流しながら、利一は、

「はい」

と、弱々しい声を出した。まあ、問題無い。そして俺と利一は、取りあえず廊下を歩く。

「ち、ちいあき」

わざとだろうが、女々しい声で俺の名を呼び、

「最近俺に対してのツツコミが激しすぎやないか？」

「何言っているんだ、利一はドMだから喜んでるんだろ？」

俺は、邪気の無い口調で利一に言った。

「いや、俺はドMじゃないからな、それともう少し柔らかく、ツツコンでもいいだろう？」

「そんな風になったら、俺のお前の関係は、崩壊するがそれで良いなら良いけど。大体お前は、どうしてそんなに俺に構うんだ？ 構うにしても他の構い方が在るだろう？」

コイツの俺に対する言動はとにかく気持ち悪い。

「だってさ——千秋優しいじゃん」

「はあ!？」

不意な言葉に少し動揺してしまった。

「俺のどつ、何処が優しいだよ」

「俺なんかに構ってくれるしさ——不意な言葉にそんな驚くし。素直じゃん」

コイツは頭が良いんだか、悪いんだかたまに分からなくなる。頭脳は良いんだが。

「もしかして、照れた？」

「照れて無い」

ちよつと声に感情をこめて言っただ、

「顔が赤くなってるぞ」

「照れて無い、言ってるだろ！」

そんな事を言っているが、若干頬が熱い気もする。もしかしたら顔が赤くなっているかもしれない。こんな事を面と向かって言われるのは苦手だ。

にやにやしながら俺の顔を見る利一。

「改めて聞くが、何処で食うんだ？」

俺はこのまま行くと、話しの主導権を利一に取られると思い、無理に話しの流れを変えた。

「せっかく高校生になったんだから、決まってるじゃんか。天気も良いし、屋上で昼飯って、俺やってみたかったんだよねー」

目を輝かせて、言う利一。

「おいおい、屋上っていったら、不良のたまり場ってイメージしかないんだが」

なんかんだ言いながらも、階段を上る。

「大丈夫だって、今、平成何年だと思っっているんだよ、そんな絶滅危惧種居る訳が——」

そして、屋上の鉄の扉を開けると、青い空の下、心地の良い風が髪をなびかせたと思っただら、目の前に在った光景は、煙草を啜えた、不良4人が立っていた。

絶滅危惧種居た——！！

第4話 屋上

そして、屋上のドア開けると、気持の良い風が、髪をなびかせたと思ったら、目の前に在った光景は、煙草を啜えた、不良4人。

絶滅危惧種居たー！！

『不良』

ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエンス種サピエンス亜種に属する種である。

大半をオスが占め。稀にスケバンと言うメスの存在も確認されている。1970年代頃に爆発的に増えたが時が経つにつれ、繁殖能力も減少し衰退の一途を辿っている。身体的には一般の人間と変わり余り見られないが、外見上の特徴があり、長ラン、リーゼント、オールバック、剃り込み、眉毛の全剃りなどが挙げられるが、それは過去の話であり、その特徴を持つ個体は2000年以降は殆どUMA（未確認生物）並みの遭遇率を誇る。他にも、呼び名として『ヤンキー』などと言われる。よく混同されがちだがDQNとは違う生き物であり——口癖として「テメー」や「あん」などの鳴き声を放つ事もある。

「あん！」

入り口から10メートル程離れた所で丸い円陣を組んでいる男達のが、俺一般高校生と、隣に居る一般変態性を睨む。

俺達は、不良達に聞こえ無いように囁くようにして、

「おい、利一、あんだって、『あん』」

「『あん』って何だよ、俺の知っている『あん』って、あんこの『餡』と、こないだ見た、保健のDVDで観た、女の人の喘ぎ声の『

あん』しか、知らねえよ」

「アレじゃねえか、外国語じゃね？ どっかの国の挨拶的な」

「あんな、怖い顔で睨む挨拶する、国が在ったら、もうその国終わってるよ、北〇鮮も真っ青だよ」

そんな話を男達に聞き取れないくらいの声で話している時、俺は二つ間違っている事に気付いた。そこに居るのは6人だと。不良らしき一人が、何故か分からないが、うつ伏せに倒れていて動かない。もう一人は、不良4人に囲まれている、女子生徒がいることにだ。

男4人が黒く分厚い本持った、女子生徒を囲んでいることに。そして、囲まれてい女子は、朝俺達に毒舌を吐いた女子であり、俺のクラスメイトだった。一時間目のホームルームでの自己紹介をした時にアイツだけは、覚えた。記憶力は悪いほうだが、迫力のある苗字と自分の名前と一文字被っていて何より、初対面で毒舌を吐かれたのだから、意識をしなくても頭に残ってしまったていた。

「鬼塚 おにつか 千尋 ちひろ……」

そう俺の口から、自然にこぼれた。

「ちよつと、貴方達、臭いから、消えてくれないかしら」

男4人に囲まれた状況で鬼塚は、全く怯むことなく。男達に言葉を浴びせる

「あん、何だ、このアマ！」

また『あん』だ。

「ああ、そう、貴方達の、そのちっばけな脳じゃ、今の言葉を理解出来なかったのね。御免なさい、じゃあ、訂正するわ、そのフェンスから、飛んでくれないかしら？」

おい！ 煽ってどうするつもりだ？ 『勝ち目なんかないだろう』普通なら、そう思うところだろうが、俺は男達よりも、鬼塚の方が怖く感じた。

「おい、どうする？」

利一が俺の耳元で囁く。

「どうするって、どうにかして助けるに――」

ドガ！

一瞬、鬼塚から目を離れた時、何か固いモノが柔らかいモノに勢い良くぶつかるような鈍い音がした。音がした方向の鬼塚を含めた男達の方を見ると、鬼塚の前に居た男が、のけ反るような格好で空中に居た、足が屋上の床から離れている、いや、飛んでいる？ 鬼塚の右手は、縦方向に本を向けて、大きく上げていた。

そこで、ようやく俺は理解した。鬼塚がこの分厚い本で男の顎を吹っ飛ばしたのだと。

「がッ」

ドガ

そして、男は、その場に仰向け倒れ込んだ。動かない。痛いなどの声が出るのかと思いきや、ぴくりとも動かない、どうやら、気を失ったらしい。

他の3人も倒れた男を見て動かない、動揺しているのが表情から読みとれる。

俺と利一も動かない。そして、次に動いたのが、鬼塚だった。

女とは思えない身のこなしで、男達の元へ飛び込んでいき、本で蹴散らして行く。

そして、1分後その場に立っていたのは、鬼塚一人だった。圧倒的。まるで、大人と子供の喧嘩のようだった。

第5話 就寝

そして、男5人が倒れている場を悠々歩き屋上の出入口つまり、俺達の方へと歩いて来る。

「全く、人がせつかく、静かに昼食を取ろうとしてたのに、飛んだ邪魔が入ったわ」

俺と利一の間を通る、鬼塚に俺は、

「おい、コレどうするんだよ、ちよつとやり過ぎなんじゃないのか？」

その言葉を聞き、足を止める。

「これから、教員に言って来るわ。まあ、最低でも停学、悪ければ退学かもしれないわね」

自分を自嘲するかのように、少し笑う鬼塚。

「別に後悔はしてないわ——あと、やり過ぎ？ 知った風な口を聞かないでくれないしら、そいつらは私の夢を汚したのよ」

何か特別な訳がある。そんな言葉に俺は感じられた。

鬼塚は階段を降りて行く、その足取り重そうだった。

「ふう〜おかねえ〜」

緊張の糸がれたらしく、利一が言葉を漏らす。

「飯はどうする？ こんな惨劇の現場で俺は食いたくねーぞ」

利一は、何も見ずに。

「昼休みは、あと、22分37秒あるけど」

「仕方ない、教室に戻って食つか」

「えー」

遠足が中止になった、小学生みたいな顔をする利一。

「やめろ、気色悪い。黙って教室で食つてろ」

そう言つて、俺達も階段を降り始める。その時、俺は、朝のメールの事を思い出した。

「そうだ、利一、このメールを送つたの、お前じゃないよな？」

俺は、携帯を取り出し、画面を開き、利一に見せた。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

「ん、何だコレ？ 訳分かんないな」

「宛先不明なんだよ、俺はお前の悪戯じゃないかと思っているんだか」

「俺じゃ無いよ、俺だったら、千秋に送るんなら、もっと可愛くデコレーションしてやるぜ」

親指を立て、自信ありげに言う利一。マジ気持ち悪い。でもどうやら、コイツでは無いらしい。

「ああ、食欲無くなつて来た」

「えっ、何で？」

俺は、利一の胸ぐらを掴んで、

「お前のせいだよ」

ドガ！

利一の額に頭突きを食らわして、一足早く、階段を降りる。

「じゃあな、黙って、一人で飯食つてろよ、お前は、喋んなきゃ普通なんだからよ」

「痛てて、分かつて無いな千秋、俺が変なのは、お前の前だけだよ」

「お前今日、家に帰っても、家があると思っなよ」

「それどういう意味!？」

それから、何だかんだで、利一は、何故か俺の教室で飯を食って、何も特に変わった事も無く、学校も終わりに家に帰った。

時刻は、23時40分。あと20分足らずで、4月6日も終わる。俺は、睡眠という三大欲求の一つに促され、いつもよりも少し早いが就寝することにした。春休みボケがまだ抜けて無い事もあるし、馬鹿の相手をして疲れた事もある。高校が始まって間もないと言うのに、色々な事があつたな。

俺は、ベッドの布団の中に潜り込むと、あっという間に意識がなくなった。

俺の枕元で、これでもかと、振動してバイブ音を撒き散らしながら自己主張をする。人類の英知の結晶。

「あーうるさいな」誰だ! こんな朝っぱらから、メールなどしてくる奴は」

部屋のカーテンの隙間からは、暖かそうな日の光が指しこんでいる。残念ながら、もう朝のようだ。

俺が寝ころんだまま、布団から手を伸ばし枕元にある携帯を開けてみると、6時58分をデジタル表示がとても分かりやすく教えて

くれた。いつも起きるのは7時ジャスト。どうやら、もう2度寝を
している暇は、無いみたいだ。

携帯には、新着メール1件。宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

「また？ 誰だよホントに——」

ジリジリジリジリ！

「うるさい！」

バン！

俺は一つの違和感、異変を感じた。そして携帯の日にちを見た時、
それは確信に変わった。

4月6日？ おいおい、携帯がぶっ壊れたのか？ 今日4月7
の筈だろ……

第6話 4月6日

4月6日水曜日？ おいおい、携帯がぶっ壊れたのか？ 今日
4月7日木曜日の筈だろ……俺は自分の目を疑い何度も手で目を擦
って見るが、携帯画面の表示は4月6日のままだ。

2階の自分の部屋から、転がりそうな勢いで階段をかけ降りて、
1階のリビングのテレビを凝視する。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

妹が朝食を取っていたが、そんな事は関係無い。俺はテレビの
モコンを回す。

ピ、ピッ、ピッピッ

「ちよっと、お兄ちゃん、私がテレビを観てたのに」

妹が言っているが今はお構いなしだ。そして、天気予報をやっ
ている番組で俺の指は、止まる。

「今日、4月6日の予報は、関東地方を中心に快晴——」

なっ！？ 今日4月6日！？ おいおい、アナウンサーの間違

いか？ それともこれは、録画か何か！？

俺は、台所へ行き、朝食の支度をしている母さんに——

「母さん！」

「どうしたの、そんなに慌てて？ まだ時間はあるでしょ。昨日入
学したばかりで、落ち着かないのは分かるけど」

昨日？ —昨日の筈だろ——昨日はもう普通に学校へ行って、利
一を殴ったりして、鬼塚が、不良をやつけるとところを見たりした筈
だ。

「昨日が、入学式！？ —昨日じゃ無くて！？」

「なに寝ぼけているの、昨日は、私と一緒に、入学式へ行っただ
じゃない」

アレが夢？　アレが夢ならハイビジョンブルーレイも真っ青な高画質だぞ。現実も夢も区別出来るモノじゃない。

そして今日だされた朝食も昨日と全く同じモノだ、テレビでやっているニュースも昨日観たモノと一緒にだ。

俺はまだ事態を把握していない。

混乱している。麻痺している。

誰でもいい、この状況を俺に理解出来るように説明してくれた奴には土下座してやっても良い。

絶叫マシンのアトラクションに乗り終わった直後にいきなり意味不明な公式を解けと言われても、こんなに頭かはパニックたりしないだろう。

しかし今日は、6日だろうが7日だろうが平日であり、学校へ行かなきゃならない日だ。別に休んでも良いかと思っただが、親も居るし家に居ても進展が無いと思い、学校へと向かった。

自転車を漕ぎながら、情報を整理して、俺は一つの結論を出した。

アレは、夢だったのか？——はは、そうだな、夢だ夢。シー

クムント・フロイトさんも、確かこんな語録を残していたし「夢は現実の投影であり、現実が夢の投影である。」で在るって言うてたし、まあ意味分かんねえけど。頭ではこの異常事態を解っているが、俺は現実逃避をする事によって自分を保ち、自転車を漕ぐ。気分の問題なのか、体調が悪いのか分からないが、長年連れ添っているこの両脚は自分史上1番重く感じた。

第7話 人間時報

そして学校へ着いた俺は、自転車小屋に自転車を置いていた。確か夢だということで、校門の方から利一が馬鹿みたいに――

「よっおおー！愛ちゃん」

そう言いながら、俺の方へ自転車を走らせる、利一。

んな、馬鹿な！ あれは夢だった筈だろう、なんでここまで一緒なんだ！？ デジャブとか既視感なんてレベルじゃあねーぞ！

今日という時間が経つたびに、夢のいう逃避を壊されている気がした。

俺は自転車を漕いできた利一をスルーした。

利一は、不思議そうな顔をしている。そりゃそうだ、いつもの俺なら何らかの、アクションを起こしていた筈だ、現にあの時は、ラリアットを食らわしてやった。

自転車を置いた、利一が俺の元へ歩いて来た。

「どうしたんだ千秋？ いつもと違うぞ、体調でも悪いのか？」

俺はふと思った、コイツなら――

「利一、今は何時だ！^{いつ}」

利一は、何も見ずに、

「8時24分も26秒を回ったとこだけど」

「違う、何年、何月、何日、何時、何分、何秒で聞いているんだ！

「なんだよソレ、どうかしたのか？」

俺はいいから答えてくれと利一にせかす。

「ああ」

少し戸惑いながらも返事をする利一。

もし、世界中の時計が狂ったとしても、コイツだけは狂わない筈だ。それくらいに、俺は時間に対して、利一に信頼している。

俺は、携帯の電波時計の表示に見ながら、利一の言葉と、照らし合わせる。

「今日は、201×年、4月——」

もし、利一が全部合ってたのなら、俺の記憶を夢か、空想か、妄想か、幻想か、とにかく実際にそんな事は無かった、自分の造り出したモノと信じられる。

利一が4月7日だと言えば俺は、俺は世界中の時計よりも、利一を信じる。あいつが時間を間違える筈は無い。何故なら利一は、人間時報。完璧な体内時計を持つ人間だ。俺は、中学から利一を見てきて、今まで間違った事など一度も無かった。

「——6日——8時24分も52秒を回ったとこだけど？」

俺は、甘く見ていた、利一は、完璧な体内時計を持つ人間。7日か6日で俺は、この事を判断するつもりだった——だが結果は、ありえない方向へと向かってしまった。

利一が8時24分も52秒と言った時、俺の携帯の電波が示していた、時間は、8時25分54秒。1分2秒も誤差がある。

「利一、携帯を貸してくれ」

「えっ何だよ？」

さつきから利一は、ずっと困惑気味だ、状況が読み込めて無いらだ。

「お前の時計と、俺の時計を見比べたい」

利一から、携帯を借り、自分の携帯と時刻を見比べる。もしかしたら、やはり俺の携帯がイカれているんじゃないかと思ったからだ。

いや、そう願いたかった。

借りた携帯は、同じ時刻を指していた。

「利一、お前か携帯、どつちかの時計が狂っているぞ」

「はあ？ そんな馬鹿な——」

利一に携帯を返す。

「！？アレ」

利一も驚きを隠せないみたいだった。

「どっちが、正しいか、分かるか利一」

目を瞑り、集中する利一。

「俺だ……俺が間違っていた」

まさかと思ったが、利一が間違っていた——頭が痛い、重い。

「利一……俺、ちょっと頭痛いから、保健室へ行くわ」

「おい、大丈夫か。顔色メツチャ悪いぞ」

気遣うように、言う利一。

「ああ、大丈夫だから、早く教室へ行ってくれ——」

「一緒に寝てやろうか？」

さつきと同じように、気遣うように、気持ち悪い言葉を口にする利一。

「俺と法廷で戦いたいのか」

例え国が勝手に選び雇った弁護士でも、俺は勝訴の文字を掴める自信がある。

安心した顔で利一は、

「うん、そうじゃないとな、千秋は」

「じゃあな、教室に行くから、ゆっくり休めよ」

そう言って、利一は、教室へ向かって行った。安心したのは俺もだ。取りあえず、利一は、利一だった。

第8話 保健室で考察

俺は今保健室で、ベッドに寝ている。頭が痛いと言ったらすぐにベッドを貸してくれた。今、保健の先生は、出かけて居なくなり、保健室は、俺一人だ。静かな保健室に架け時計の秒針の針の音が、カチカチと鳴り響く。

ベッドに横たわり、頭の中で、最初の4月6日と、今の4月6日について、整理をする事にした。

まず、自分の頬に右手を持って行き、一応確かめた。

「痛い」

軽く、涙が出そうになった、色々な意味で。

この異変に気付いているのは、どうやら、俺一人みたいだ。妹も母さんも、普段と変わらなかったし、完璧な体内時計を持つ利一でさえ、この異変に気づいていない。恐らく気づいているのは俺一人だろう。何故俺だけが気づいているのか、これも謎だ。

そして最初、つまり1回目の4月6日に何かが在ったと考えるのが妥当か。やはり1番怪しいのは、このメール。

俺は、携帯を開き、メールボックスを見る。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

怪し過ぎる。宛先が不明なところが特にだ。

がんばれよ、1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』これが何を意味するのかだ、1日目ってのは、学校が始まって1日目って事か？ ミッション。つまりする事？ 踏ませるなど、助ける。どちらも主語が無くて、全く分からない。

そして、おかしい点は今日、つまり2回目に利一が時刻を外した事だ。いや、もしかしたら1回目の時もすでに、外していた可能性

もあるが、もう確かめる術は無い。

幾つかの可能性が生まれた。自分がおかしいのか、世界がおかしいのか。

もし、利一が、時刻を外さなければ、俺は、自分がおかしいと結果を出していたかもしれないが、このタイミングで、利一が時刻を外すのは、偶然では無いと思う。

つまり、おかしいのはこの世界。そして、今の状況から考えられる事は、今、俺、もしくは、世界が。『今日という、4月6日を2回繰り返している』、簡単に言くと『ループ』している、これが、俺が考えている中で、一番辻褄が合う。

この最初の記憶は、1回目の4月6日。そして、今が『2回目』という事か。なんともまあ、SFな答えが、出て来たモンだ。自分で出した答えに、俺は少し笑ってしまった。

だってそうだろう、今まで、平凡に人生を謳歌してきた、奴がいきなり、こんな、サイエンス・フィクション、まるで、漫画や、アニメ、映画、ゲームのような、絵空事に巻き込まれてしまうなんて——神様でも、仏様でも良いが、配役のミスじゃないか？俺は、その辺に居るモブキャラだと思っていたが、こんな、主人公クラスの出来事、俺には、荷が重すぎる。代ってくれる奴が居るのなら、この役を代ってもらいたい。

我ながら、余りにも情けない愚痴をこぼしたが、助けてくれそうな奴は居ない。こんな事を話しても、信じる奴など居ないだろうし、下手したら、精神病棟へ入れられてしまう可能性もある。全くどうしたモノかな。

待てよ、このまま、何もせずに、明日を迎えようとしたらどうなるんだ？また、4月7日には、ならずに、また、4月6日を繰り返すのか？分からないな——

俺が頭をかかえている時、勢い良く保健室のドアが開いた。

「頭は、どうだー！！愛ちゃん！」

けたたましく現れたのは、言うまでも無いか。

第9話 チョココロネ

「頭は、どうだー！！ 愛ちゃん！」

保健室のドアを開け、けたたましく現れたのは、言うまでも無いか。

「お前のせいで、また痛くなってきたよ」

俺は立ちあがり、ベッドのそばに在る様々な医療道具が乗っている台の上から、消毒液の容器を持って利一の元へ行き、口に容器を突っ込んでやった。

「お前いつも、大きな声を出して、喉が大変そうだから、消毒してやろうか？」

「ふいません、ふいません」

そして俺は、容器を口から離して、

「で、何の用だ」

「ゴホゴホ！ なんの用じゃないよ、せっかく、昼休みで寂しいだろうと思つて、一緒に食べる為に、弁当を持ってきたのに、ほらあ、千秋の好きなチョココロネもさっき購買で買って来たぞ」

そう言いながら笑顔で、弁当箱の入った袋と、チョココロネを見せる。

さっきまでの、SF的空氣が、コイツが来ただけで一氣に崩れた。少し古いが、KY（空氣読めない）が在るが、コイツの場合はKK（空氣壊す）だな。

「おいおい、ここで飯食つても良いのかよ」

此処は保健室だ飲食していいのか疑問だ。

「大丈夫だ、さっき先生に聞いて来た、軽くなら食べても良いって、そう言いながら、近くの机に弁当を広げる利一。

「それって、軽くっていいのか？」

「人によつて、軽いや重い、その他色々の価値観は変わる。俺にとつてこれは、軽いから、問題ナツシング!」

親指立てをこちらに見せる。コイツを見ると、なんだか和むなゝああそつか、確か、動物が可愛く見えるのは、自分よりも馬鹿だからつて、聞いた事あるな。そんな感じか。しかし、この馬鹿は、勉強が出来る。前言撤回だ、そう思うと、やっぱり腹立ってきた。

まあ、確かに、いつの間にか昼休みで、朝も色々あつてろくに食つて来てないから、腹ペコだ。

俺も、利一の前に座り、バックから、弁当を取り出した。

「いただきます」

飯を食べだして、すぐに利一が、

「千秋、さつき、職員室に行った時にさ」

ああ、此処で、飯を食つて良いか聞きに行った時か。

「屋上で、何かが在つたらしくてさ、先生達が慌ててたんだよ、どうやら、話を聞いて察するに、屋上で喫煙をしていた男子5人が、女子に乱暴しようとしたら、逆にやられたとか、どうたら、こうたら」

その話を聞いてすぐに、1回目の屋上での出来事を連想した。

この世界と1回目の世界の起きた出来事が合っているか確かめる為に、

「その女子つて、鬼塚つて名前じゃないか？」

「えっと、女子かどうかは、分からないけど、確かに鬼塚つて名前は、確か言ってたな」

どうやら、2回目の世界でも、鬼塚は、男子に絡まれて、勝ったみたいだ。

そして俺は飯が食べ終わり、5時間目は普通に授業に出た。授業

内容は1回目と全く同じオチを知ってしまった推理映画を見るよりも辛かった。

授業が終わった俺は、この世界で何すれば良いかも解らないので、そのまま周りの生徒達と同様に帰路へと着いた。

第10話 枕でため息

そして、今は4月6日。23時33分。

俺は自分の部屋のベッドで仰向けに横たわり、頭の中を整理している。

もし、これでまた4月6日に戻ったら、恐らく何らかのアクションを起こさないと、4月7日を迎える事はないだろう。もしこれで何もせずに、4月7日を迎えられたら、ただの夢だった事で、笑い話で済むんだけどな。

メールの内容の、『踏ませるな、助ける』きつとこれが何らかの鍵になっていると考えるべきか、まずは、何を『踏ませるな』って事を考える事か、『踏ませるな』コレは、俺に対して言っている言葉で、『何かを踏ませるな』って事か？俺自身に言っているのなら『踏むな』になっている筈だ。

一体何を踏ませないようにすればいいのか？1回目、2回目と、俺の周りで何かを踏んだ奴なんか、俺の知る限りは、居なかった。つまり、もっと視野を広げる必要があると言う事か。

俺の行動によって、この4月6日は、大なり小なり確実に変化する。1回目と2回目では、大分内容が変わった。もし、今日、2回目を1回目と同じような行動をすれば、恐らく2回目目の内容は、1回目と酷似する筈だ。

このメールの『踏ませるな、助ける』は、本来なら、何かが、踏まれるモノを踏まれないようにしろ、助けられなかったモノを助ける、そういう意味か？それが、ループを解く鍵なのか？そうだと、考えると、まずは、これが何かを特定する必要があるな……はあゝ何で俺が、こんなに頭を使わんといかんのだ、俺は、頭がとっても、悪いんだぞ。あの高校が受かったのも奇跡だったのに。あゝあそこで運を全部使い果たして来たのか？

ため息をつき俺は枕に顔を埋める。

顔を枕からお越して部屋の掛け時計に目をやると、時刻は、23時58分。

あと2分で今日も終わる。2分経ったら、どうなるか、これどうやく、内容が大体分かるだろう。もし、4月7日になれば、ただの笑い話だ。もし、また4月6日になれば、確実に世界、もしくは俺がループしてると、確証が得られる——4月6日に戻ったのなら俺は、ループを解かなければいけない。何故なら、俺しかこの事態に気付いていないからだ。

何故俺なのか？

何故俺だけなのか？

流石に、何日も同じ日を繰り返してられるか。

そして、それを解く鍵が、あの謎のメール。これは、ラッキーと思うべきなのか？ あのメールが無ければ、確実に暗礁に乗り上げてた筈だ。

そして、時計の秒針が、文字盤の12を指すと同時に俺は、意識を失った。

俺の睡眠を邪魔したのは、『予想通り』目覚まし時計の煩いアラームでは無く、一つのメールの着信だった。

俺の枕元で、これでもかと、振動してバイブ音を撒き散らしながら自己主張をする。人類の英知の結晶。

携帯には、『新着メール1件。』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

第11話 黒くて分厚い本（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第11話 黒くて分厚い本

俺の睡眠を邪魔したのは、『予想通り』目覚まし時計の、うるさいアラームでは無く、一つのメールの着信だった。

俺の枕元で、これでもかと、振動してバイブ音を撒き散らしながら自己主張をする。人類の英知の結晶。

携帯には、『新着メール1件。』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

時刻は、6時58分。携帯は、4月6日を指している。

俺がやらなきゃいけない事は、まず、『踏ませるな』をなんだか特定することだが——『助ける』——俺が変えなきゃいけない事は、1回目、2回目と同じことが起こっている事の筈だ、それを踏まえ、俺が『助ける』で、一番最初に連想したのが、不良に絡まれている鬼塚だ。まあ、不良から助ける必要も無いように見えるが、女子が男子に絡まれているんだ、それを助けるって事が、『助ける』が示している事の可能性は在る。そして、恐らく、助けるの前にやらなきゃいけない事が、『踏ませるな』。その何かを踏ませてしまったら、また、4月6日に逆戻りって事になるだろう。

ジリ——

目覚まし時計が鳴った瞬間、俺は、すぐに止める。鳴るタイミン
グはもう覚えた。

「今日も面倒な、4月6日になりそうだ」

俺はベッドから起き上がりカーテンの隙間から漏れる朝日を見ながら、呆れ気味に呟いた。

学校へ自転車で向かう俺は、今日、一つの可能性にかける事にし

た。1回目、2回目の出来事の中で、一番印象に残っているのは、アイツ、『鬼塚 千尋』だ。そして、アイツは、不良に絡まれる。『踏ませる、助ける』の『助ける』意味は、鬼塚の事を不良から助ける事だろうと言うのが今の俺の変考えだ。だけど『助ける』の前に、『踏ませるな』が在る。昼休みに、鬼塚が絡まれるところを助ける前に、何か、踏ませないようにしないとならない。

『踏ませるな、助ける』の助けるが、鬼塚の事なら、踏ませるな、も鬼塚に関係ある可能性もあるな。

俺が、今日。3回目の4月6日にする事は、鬼塚の観察。ばれたら、あの強烈な奴だから、何されるか、わかったもんじゃ無いな。メタギのスネ○ク並みに気を付けなければ。

取りあえず今日、3回目は、馬鹿（利一）をスルーし。鬼塚を観察することにした。

ホームルームが始まる前の時間、鬼塚は、1回目と同じく、独りで本を読んでいる。黒くて、分厚い本だ。なんの本だろうか。もしかして、デスノ○トじゃないだろうな。まあ、冗談は置いて。

それから、1、2、3、4時間目が過ぎ、昼休みの時間がやって来た。鬼塚は、授業が終わると、弁当の袋を持って、教室を出て行った。俺もすかさず後を追う。

予想通り鬼塚は、階段を上って行き屋上へと、入って行った。俺もそれを確認し、階段を上って、屋上へ入ろうとしたが、俺の前に4人組みの男子生徒が、屋上へと入って行く、この顔は覚えている不良達だ。俺は階段の隅へ行きその場をやり過ごした。屋上へ入って行った。俺は、屋上のドアを少し開け、中の様子を窺う。

グラウンドを向いて座って、お弁当を広げようとしている、鬼塚に向かつて、不良4人が、煙草をふかしながら歩いて行く。

「何してんだよ、テメー1年か？ 此処は、俺達のたまり場なんだよ、どっかへ消えろよ」

「うるさい、貴方達が、消えなさい、生ごみが」

「んだと、コラー変な本を置きやがって」

一人の男子が、座っている鬼塚の隣に置いてあった、黒い分厚い本を『踏んだ』。

鬼塚は、その男を、物凄い形相で睨んだと思ったら、踏んでいる、足を蹴り飛ばし、そして、倒れた男を踏みつけた。

そして、本を持ち、男達に囲まれる、鬼塚。この光景をは、俺は、前に見た事があった。そうだ、分かった、1回目は、この場面で俺と利一が来たんだ。

そして、その後は、1回目と同じように、鬼塚は、男達を蹴散らして行った。

そして、3回目。4月6日の23時58分。

自分の部屋で俺は、考える。いや、もう、やる事は決まった。

『踏ませるな、助ける』これは、きつと鬼塚の事だ、そして俺がやらなきゃいけない事は、本を踏ませないようにすること、不良から、鬼塚を助ける事？ の筈だ。

今日、学校が終わってから、あった急遽在った職員会議を、俺は、廊下で盗み聞きしていた。このまま行くと、鬼塚は、停学処分になるらしい、だとしたら、それから助けるという意味の可能性もある――俺の意識は、ここで途絶えた。

俺は、携帯のメール受信のバイブ音により目が覚めた。モチロン、時刻は、4月6日6時58分。

携帯には、『新着メール1件。』宛先不明。

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

全て予想通り。いや、いつも通りだが、これも今日で終わしてやる。俺が、今日やる事は決まっている、鬼塚の本を踏ませないようにし、鬼塚と不良の喧嘩を止める事。

なんとなく、携帯で今日の星座占いを見た。景気づけだ、4回目で初めてだったが。

運勢は、12位。新たな、出会いがあるかも。

「12位か、全くついて無い1日になりそうだ」

第12話 着信

「12位か、全く、ついて無い1日になりそうだ」

そして、4時間目、昼休み。

当然のように鬼塚は、教室を後にする。そして俺は教室を出ようとする。利一が、弁当を持って、俺の教室に入ってきた。計算通りだ。

「おつ、千秋、何処行くんだ？」

俺は、利一の肩に手を置き、

「利一。職員室へ行つて、先生達屋上へ呼んで来てくれ」

利一は、驚いた顔で、

「はあ、何でだよ？」

「さつき、小耳に挟んだんだ、屋上で今不良が煙草を吹かしているつて」

状況が読みとれない利一に、

「いいから、頼むぜ、親友」

そう言つて俺は屋上へと走る。

利一もさっきの言葉が効いたのか、凄いスピードで廊下を走つて行った。

「はあ、はあ、はあ、はあ」

最近、運動不足だな、脇腹が痛い。階段を走つて登るのが、こんなに辛いとは……まだ、踏んでくれるなよ『あん』の奴ら。踏んだら——どうなるか、また戻るのか……

そして、屋上のドアを静かに開けて、目に入つたのは、10メートル程先で座っている鬼塚と、それを囲む5人の煙草を啜えた不良。

良かった、まだ本は踏まれていない。

俺は鬼塚方に向かって脇腹痛みに耐えながら全速力で走る

「うるさい、貴方達が、消えなさい、生ごみが」

ちくしょう、3回目と同じだ、この後、不良が、

「んだと、コラー！ 変な本を置きやがって」

足を上げ、本目がけ、足を振り下ろす男子。

「させえるかああ！！」

ふざけんじゃねえぞ。もう沢山だ、終わらしてやる、4月6日を永遠に生きたいと思っている程、これから先の人生に絶望してないんだよ。

あと、数十センチ――

俺は男達の中へ潜り込み、本を間一髪のところまで掴み、鬼塚の手も握り、男達から距離を取った。

「ちよつと、アナタ何？ 勝手に人の手を握って。ちよつと、どいてくれるかしら、あの単細胞な、馬鹿に、赤色でも見せようと思っっているんだから」

「あん！ 何だテメーは、ソイツの連れか？」

おいしい！ 煽るなよ。てか、アイツまた、『あん』だよ、ホント意味知りたいな、ググレば出て来るのか。とつ、そんな事、考えている、暇は無い。

鬼塚は俺に向かって右手を出し、

「まあ、取りあえず礼は言っとくわ、ありがとう。だから、その本を返してくれるかしら」

「ああ、分かった――」

俺は、小声で、

「ちよつと、待て！ 本を返しても、お前、あいつ等に手を出すなよ」

「なんで、貴方の言う事を聞かないといけないのかしら？ 疑問だ

わ

イラついている様子で俺に言う、鬼塚。

疑問？ 俺にとっては愚問だ。

「なんでって、お前が手出したら、あいつ等、病院送りになっちまうだろ」

不良達を指さして、大きく叫んでしまう俺。

「な！？」

俺の言葉に驚いている不良達。だがお前達は知らないかもしれな
いが、コイツは、それ位の戦闘力を持っているからな、お前ら3回
中、3回とも、ノックアウトだぞ。

「だから下手に手を出してお前が停学とか退学になったら、馬鹿らしいだろ？」

「そうね、確かに、その通りかも、知れないけど、アレは、どうするの？ 私達の意味に関係なく、向こうは、やる気満々みたいだけ
ど」

確かに不良達は、今にも、襲いかかってきそうな勢いだ。

たくつ、利一は、一体何しているんだ、まだ、教員は来ないのか？

「じゃあ、私は、何もしないから、貴方がなんとかしなさいね、ヒーローさん」

まるで、からかうように、言い、俺から5メートル程離れる鬼塚。

「ほお、女を庇うなんて、いい度胸してるじゃないか」

じわじわ俺との間合いを詰める良5人。どうする？ どうする？

俺にコイツらを相手に出来る戦闘力なんてないぞ！

逃げれば、ループ。逃げなきゃ、殺られる。

どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？

どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？ どうすればいい？

そして、出した結論は。

はは、こうなりや、玉砕覚悟だ。俺は、もうどうにでもなれ、思
った其の時。携帯のメールが来てバイブが鳴りポケットから右足へ
振動が伝わった。

第13話 添付ファイル

はは、こうなりや玉碎覚悟だ。俺はもうどうにでもなれ、思った其の時。携帯にメールが来てバイブが鳴り、ポケットから右足へ振動が伝わった。

ちくしょう誰だこんな時に、俺が携帯に目をやると、そのメールは宛先不明だった。

！？ 俺はすぐにメールを開いた。その中には、

From 不明

Sud 『格闘技』

使用限界10分。ファイルを開き耳に付ける。

なんだ！？ このメールは、だが今はそんな事を考えている場合じゃない。あの宛先不明のメールだ、これはきっとこの状況の打開の策だと信じ、藁にもすがる気持ちで、俺は言われた通りにメールに添付されたファイルを開き携帯を右耳へ当てた。

「何だ？ 助けでも呼ぶのかあ？」

右耳に携帯を当てると、機械的な女性の音声のようなモノが何かを言っている。

「ダウンロードファイル格闘技。使用限界10分」

そんな音声が聞こえると、俺の頭の中に何かが流れるような感覚が広がる。映像と言葉。つまり情報が一気に頭に流れて来るのが分かる。もしかしたら死ぬ前に見るといふ走馬灯は、こんなモノなのかもしれない。

—— 少しの間思考が停止した気がした。

「死ね、オラああッ」

一人の不良が俺の左頬に向けて、右拳を繰り出す。俺が反応出来る筈の無い速度で——

「はぁッ」

意識が戻った……違う、今までと違う自分になった。

ドガ！

「ぐオッ」

俺に向かって来た、不良は俺の左横で倒れて蹲っている。動かない、どうやら気絶しているみたいだ。

何が起こったか、俺が把握するのに数秒かった。そして、分かったんだ。『俺がやったんだと』俺は、無意識にいや、きつと自然に、まるで熟練された格闘技のスペシャリストが、咄嗟に襲われた時、自らの技を使用し相手を蹴散してしまうような、そんな自然な事が、不自然にも俺に起こったんだ。

俺は、不良が放った拳を見極め、その手首を右手で掴み、柔道――いや違う、俺の知っているものと、柔術の技のように、捻り上げ、相手の体制が崩れたところへ、右足をかけ地面に叩きつけたのだ。

それを見て驚いて動きが止まっていた残り4人不良達が、一気にかかって来た。

俺は、4人が自分に到着する前に、自分から飛び出して、自分から見て一番右に居る不良へ飛び込んだ。

「！？」

右拳を下から斜めへと不良の顎へと放つ。

体が回転するのが分かる。

的確なタイミングでステップを踏みこんだのが分かる。

きつと自分がこの姿を第三者の視点で見ていたのならきつと、プロボクサーかと思う程の美しいホームだと思うだろう。

俺の右手は的確に不良の顎にヒットする。だが余り感触は無い。スツと抜けたような感触が手に残る。

殴られた男は、その場に崩れるように、膝を着き、そして床にうつ伏せに倒れ込んだ。倒れる時には、もう意識が無かったのか、手を着いたりもせずに戻るで、糸の切れた操り人形のように。

残り3人は、それでも俺に向かって来て、1人が俺の左脇腹に向かって蹴りを繰り出す。避けれるスピードだったが、俺はその足を両手で受け止め、ソイツを持ち上げまるで、日本刀の抜刀術のように左から右へ振り、一人の不良に向かってぶっ飛ばし、手を離す。二人は四メートル程吹き飛び、倒れ、そのまま沈黙した。

最後の1人はやられた仲間達を見てビビっていたが、それでも俺の顔に目掛けて右ストレートの拳を打つ。

どうやったのかさえ解らなかった。最後の1人が拳を打った、1秒後。そいつは、空中を綺麗に1回転して、地面に倒れた。

そして、静かになった屋上を見渡す。立っているのは俺と鬼塚だけだ。

自分で倒し沈黙している5人を見て体が震える。

なんだコレは！？ 何なんだ！？ こんな力、俺は知らない——ふつと俺は、鬼塚の方を見る。俺はどんな表情をしているのかさえ分からない程、動揺している。鬼塚の顔を啞然と驚愕が足したような顔だった。

鬼塚の顔を向いてすぐに、俺の頭にまるで電気が走ったかのような痛みが走る。ただの頭痛とは違う。脳みその中から、針で刺されているかのような痛み。

俺は痛みに耐えかね頭を抱える。そして、膝をついてその場に倒れた。意識が途切れる少しの間、誰かの声が聞こえたような気がした——

第14話 辻

目を覚ますと、どうやら何処かのベッドらしいとすぐに分かった。暖かい掛け布団とマットレスの感覚がなんとも心地が良い。

薄く開いた瞼をさらに広げると此処が何処なのか分かった。二回目の4月6日でもお世話になった保健室のベッドの上だ。

俺が起き上がると、ベッドの横のパイプ椅子に座っている、利一の姿が。

「おつ、目え覚めた？」

「ああ」

まだ、良く状況が理解してなかったが、数秒送れて思考が覚醒した。

「今、何時だ？」

掛け時計が確か保健室に在ったと思ったが、利一が居るのであえて利一に聞いた。

「今は、5時17分31秒を回ったところだよ、千秋は、昼休み屋上で倒れてからずっと眠ってたんだからな」

「そうか……」

俺は静かに頷きながら言った時、保健室のドアが開き、一人の白衣を着た20代前半位の男性が入って来て、俺の寝ているベッド横まで来た。最初は保健医かと思ったが、2回目の4月6日の世界では、保健医は、女性だったので保健医では無い事に気付いた。

「あの、貴方は？」

「僕？」

白衣の男性は自分顔を人差し指で指さし、微笑しながら答えた。

「僕は、辻^{つじ}だ。物理の教師をしている。今保健医の先生は、あの不

良達を病院に連れてついているから、僕が代りに様子を見に来たんだ」
病院と言う、単語を聞いて不良達は大丈夫か？　もしかして、凄
い怪我なんかしているんじゃないかと不安が頭の中を巡る。

その表情を読み取ったのか、辻と言う教師は、

「大丈夫、心配しなくても良いよ、見たところ外傷は殆どないし、
軽い脳震盪による気絶みたいだから大した事無いよ、病院に行つて
いるのは念のためだよ」

俺はその言葉を聞いて安堵した。もしこれで大怪我などされてい
たら、この先の高校生活に支障しかねないと思つたからだ。

「そうそう、君は、女の子が襲われるところを助けたんだよね、そ
の女の子が言つてたよ、自分が絡まれているところを助けて貰つた
って」

女の子と言うのは、鬼塚のことだろう、俺の事を氣を使ったのか、
そんなの事を言っていたらしい。

「ああ、不良達が悪いみたいだからね、君は何も心配は要らないよ。
君は、いきなり頭を押さえて倒れたって聞いたけど、問題無いみた
いだね、緊張感によるショックが原因だろう。下校時刻までここで
休んでいてもいいよ。別に帰る時の報告は良いから」

そう言つと、辻はお大事にと言つて保健室から出て行つた。

第15話 チョップ

辻はお大事にと言って保健室から出て行った。

俺は起こしていた体を倒して、後頭部に両手を持って行く感じで仰向けに寝て、ふう〜と大きく息を吐いた。

隣に居る利一に何気なく目をやると、少し目が合った所で、利一が目を逸らした。

「んっどうした？」

利一は、両手を膝の上に握り締め、顔を2秒程下に向けてから顔を上げ、いつもの利一らしく無い表情を浮かべて、俺に行つて来た。「悪いな、千秋。俺が、先生達を呼んでくるのが遅かったから、なんか大変な事になっちまって」

俺は、体を起こし、軽く笑いながら、利一に返す。

「そうだな、お前が呼んでくるのが遅かったから、俺が此处で寝ているんだが——ティッ」

俺は浮かない表情をしている、利一の頭を軽くチョップした。

「利一、俺がそれ位で、怒ると思っっているのか？」
えっ？ と意外そうな顔になる利一。

「別に、お前の所為でこうなった訳じゃないし、俺が勝手にした事だ、気にすんなよ」

そう言つた俺に対して、利一が、

「さすが俺の親友——！！」

と言いながら、俺に抱きつこうとして来たので、正当防衛としてさっきのチョップの20倍位の力を右手に込めて、利一の頭に勢い良く振り下ろした。

「アベシッ！」

利一は、凄い勢いで俺のベッドに顔をめり込んでいる。

「お前は、もう一般人として死んでいる。そのキャラを直すつもりは無いのか？」

利一がベッドに顔をめり込ませた状態で言っているので、籠もった声で、

「そしたら、俺が俺で無くなる——」

まあ確かになど、歯切れの悪い納得をして、俺は軽ため息をつく。コイツが大人しくなっても、逆に気持ち悪いな。

それから、10分程保健室で、利一と話していたが、体方は少し重く感じる位で特に問題は無かったので、利一と一緒に下校した。

第16話 カウントダウン（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第16話 カウントダウン

家に着いて俺はベッドで仰向けになって、今日起こった出来事について、振り返る事にした。

俺は、携帯を開いて、メールボックスを開き、昼休みに屋上で不良達に襲われそうになった時届いたメールを、まるで英文を見るような難しい顔をしながら眺める。

From 不明

Sud 『格闘技』

使用制限10分。ファイルを開き耳に付ける。

「……」

普段の俺には、男4人を倒す程の力も技術も無い。それなのに、男4人を傷一つ付く事無く倒してしまった——その原因は、

「きつとこれだ……」

一人しかない自分の部屋に、独りごとが自然とこぼれた。

あの時、このメールに言われた通りにした時に起こったのは、格闘技の情報が頭の中に一気に流れて来た事。それは、映像、言葉、音声。まるで頭に直接叩き込むような、今まで体験したこと無い感覚。

ベッドから起きがり部屋の蛍光灯の紐に向かって拳を放つが、それはいつもの通りのタダのパンチだ。

「やっぱり、駄目か」

思った通り、昼に在った力は、今の俺には存在していない。使用限界10分と書いてあったけど、あの時は、10分経たずに頭が痛くなって、倒れてしまったが——限界が10分で在って、その場の状況によって変わるのだろうか？ あの時、頭が痛くなって倒れたって事はそれなりのリスクが在るのかもしれない。

最初のメール

From 不明

Sud がんばれよ。

1日目ミッション。『踏ませるな、助ける』

2回目のメール

From 不明

Sud 『格闘技』

使用制限10分。ファイルを開き耳に付ける。

これを送った人物は、同一人物だろうなきつと、だとしたら一体何なんだコレは、2回目のメールは、まるで図ったようなタイミングで送られてきたし、状況から考えれば、このファイルが、あの力を生みだした事になるが、こんな技術最先端のテクノロジーが集まるNASAでも出来ないだろう、……ああ、もうループと言い、この訳わかんない添付ファイルと良い、俺の普通な日常は、何処に迷走しているんだ、早く今まで通りの道に早く戻って来て欲しいものだ。

携帯画面をメールボックスから、メニューバーに切り替えた時に、一つのメニューが追加されている事に気が付く。

『ファイル』

写っているメニューをクリックすると、1と書かれた項目の横に『格闘技』と表示されている。さらに、それをクリックすると「ダウンロード」しますかの文字が。

これは何回でもあの能力ちからが使えると言う事だろうか？ 試してみれば分かる事だが、また昼みたいにな、倒れる可能性もあるし、コレを使った時に頭に痛みが走った事を思い出し、使うのはよしとく事にした。

そして数時間後、今俺は自分の部屋に在るテーブルの上に携帯を

開き、デジタル表示の電波時計の画面を表示し、上を向けば、電波時計のアナログの掛け時計を見える位置で正座し、時間の流れをこれでもかと言う程感じている。

時刻は、4月6日の23時59分32秒を回ったところだ、この状態でスタンバイしてからすでに30分経っている、両足の感覚は、もはや痺れしか存在していない。

大晦日に新年のカウントダウンをする奴を見るが、今の状況はその雰囲気酷似しているが、緊張度は俺の方が遥かに上を行くだろう。

嫌な汗が頬を滴る。掛け時計の秒針の動く音がやけに大きく聞こえる。

本当に、頼むぞ、これでまた4月6日になっても、俺はもう何をしたいやら全く解らん。などと考えている内にも時間は過ぎ今は、4月7日まで、あと10秒だ。

俺は一人で時計を見ながらカウントダウンを始める。傍から見ればなかなか悲しい光景だろうが今はそんな事を気にしている場合では無い。

「10……9……8……」

自然と、発する数字に徐々に力が込められる――

「7……6……5……4……」

全身から汗腺から汗が噴き出す、もう瞬きなどしていない、今俺が目で追っているのは文字盤の数字だけだ、数字が減るにつれて時間が遅くなっているんじゃないかと、想う程1秒が遅い――

「3……2……1……」

目が見開く、心臓の音が煩いほど聞こえる――

「0――!」
周りになんの変化は無い。時刻は、午前零時を指している。俺は携帯の画面で日付を確認すると――

「4月7日……」

ただ日付を言っただけなのに、その声には歓喜の感情が籠っている。

る。

勝利の雄叫びを無意識に揚げようとし立ち上がろうとしたが、30分以上ら渡って正座をしていたせいで立ち上がれずに、その場に倒れ込むが、その状態で俺は喜びを爆発させるかのように、両手を大の字に伸ばし、4月7日を満喫する。

「ヨツシアアッー！ 4月7日だああッー！」

とつ、何度か叫び声を上げて、10回以上も日付を確認し、足の痺れが無くなったあと風呂に入って俺は就寝した。

第17話 4月7日

今は4月7日の放課後。あの悪夢のような、4月6日が終わって次の日だ。

ただいま俺は、部室棟の文芸部の部室へと入部届けを出しに来ている。まだ始業式から二日しか経っていないのに、入部届けを出しに来る俺に、文芸部の5人の部員様達は、とても驚いていらっしやる。とてもやる気のある新入生とても思われているのかもしれないが、実際のところ俺は文芸部など何をやる部活など知らないし、ぶっちゃけ活動するつもりもない。中学3年間帰宅部エースの俺が、何故急に文芸部に入部届けを出しに来たかという、それはそれは深い深い、日本海溝いや、マリアナ海溝並み深い理由が在る。

始まりは、『1回目』の4月7日に巻き戻る。

4月7日

俺の睡眠を邪魔したのは、目覚まし時計の、うるさいアラームでは無く、一つの着信だった。

俺の枕元で、これでもかとバイブ音を聞き散らして自己主張をする人類の英知の結晶。

「おいおいおいおい、嘘だろ？ また4月6日って訳じゃないよな、ちゃんと寝る前に確認したし……」

俺は、恐る恐る震える手で携帯を開き、真っ先に、日付を確認する。

「4月7日、はあゝびっくりさせるなよ」

と思つて胸を撫で下ろしたのも、つかの間だった。

時刻は、6時58分。

携帯には、新着メール1件。

俺は、まさかね……と思いいながらメールを開く。

From 不明

Sud ファイトー

二日目ミッション。『部活に入れ』

「あああああ、またかよおー！！ 部活って何だよ、主語をいれろおおやあああ」

ジリジリジリジリ！

「うるさい！」

俺は、早押しクイズのボタンを押すかのように、このところにもぶつけられない気持ちを目覚まし時計にぶち込んだ。

「あー、もうついて無い」

一度起き上がった体を、力を無くした腕を広げてベッドに身を預ける。

花粉症の人が可哀そうに思える程、カーテン隙間から日の光が部屋に入る。

「ああー今日も良い天気だ」

現実逃避をするようにおれは呟いた。

そして、今文芸部の部室に戻る。

ちなみに今は、4月7日を24回繰り返している。大絶賛繰り返し中だ。もう笑えない。笑うしかない。

今までの4月7日で俺は、運動部を野球部、サッカー部、テニス部、弓道部、バスケットボール部、バドミントン部、体操部、バレーボール部、卓球部、柔道部、剣道部、空手部を。

文化部を、科学部、書道部、吹奏楽部、軽音部、新聞部、放送部、演劇部、漫画研究部に入部してきたが、ことごとく外れたらしく、この最後の文芸部へと、たどり着いた。まるで、シルクロード並み困難な道のりだ。下手な鉄砲数撃ちや当たるって誰が言ったんだか。

「えっと、それじゃあ、今日から何か読んで行く、色々本が在るか」

入部届けを出した俺に、知的っぽい、眼鏡の似あう女子部長が部屋に在る本棚を手で指しながら俺に言ってくる。

「いえ、すいませんが、活動は明日からでも、良いでしょうか？」
明日があれば来ますよ。明日があればね。

「はい、分かりました、じゃあ、明日お待ちしております」

そして、俺は、部活棟を後にし、新入生で恐らくただ一人だけ、通い慣れたであろう通学路を通って、家に帰った。

ただいま時刻は、23時47分。

俺は、ベッドでうつ伏せになり、頭を抱えていた。

これで、学校で貰った、部活案内の用紙に書かれてあった部活は、全て回った。これで、また4月7日になったのなら、八方塞がり。五里霧中もいとこだ。

そしていつものように、部屋の掛け時計の秒針が文字盤の12に差しかかったところで、俺の意識は、途絶えた。

俺の枕元で、これでもかと、バイブ音を鼓膜を震わせる。人類の英知の結晶。俺の気分が悪いのはこの物体が三半規管も揺らしているからじゃないからかと、ちょっと八つ当たりもしてみる。

僅かな希望を握り締め、俺は、携帯を開けるが、

日にちは、4月7日

新着メール1件。

From 不明

Sud ファイトー！

二日目ミツション。『部活に入れ』

はは、笑っしかないな、もう入る部活は無い。

俺は、25回連続同じ朝食を食べる。コンビニで何か買って、こ

の飽きを改善しても良いのだが、気分がナーバスなっているのか、そんな気力も湧かず。

これと言って、なんの策も無いまま、我が学び舎へと向かった。

第18話 会話

学校に着くまで、色々と考えていたが、これといって良いアイデアなど浮かばずに、教室に入っても自分の座席に着いても俺は、頭を抱えていた。教室の時計を見ると、いつもよりも大分早く、学校に着いた事が分かった。家を出る時間は、いつもよりも少し早い位だったが、タイミングが良かったのか、今日は一度も信号に引っかかる事無く学校に着いたため、それが原因だろうと、意味の無い考察をした。

担任に貰った、部活の案内の用紙に、意味は無いと思いつつも、今まで入って来た部活の名前を赤いマーカーで横に塗り潰す。

24回目、文芸部。失敗と。

見事に赤く染まった用紙、まるでスタンプラリーをコンプリートしたかのようだ。全く嬉しくは無いが。

俺が頭を抱えている時、隣の席に座っている二人組女子の会話が耳に付いた。

「ねえ、知ってる？ 駅前に在ったアクセサリーショップに久々に行ってみたら、もう潰れてただけだ」

「ああ、あそこのお店ねえ、余りお客さん入ってなかったばかりで、去年の11月にもう閉店してたよ」

などと、言う何気ない会話が聞こえて来た。この話を聞くのは初めてだ、ああそうか、今日は少し早く着いたからか、今までも同じ話をしたのかな――

俺の頭の中で、何かが動いた気がした。こんがらがっていたロブが、少し解けたような、そんな感覚だ――

在った？ 潰れた？ 去年？ 入って無かった――
もしかして――

俺はホームルームが終わった後に、職員室へ行き、気になった事担任に、聞いた。

「先生この部活の案内の用紙って、もしかして、今、活動している部活しか載って無いんじゃないですか!？」

俺は焦る気持ちを押さえて用紙を見せながら担任に問う。

「ああ、確かにそうだな。この用紙には、今、活動している、ところしか、書いて無いな」

やっぱりそうか。じゃあ、もしかしたら――

「人数が居なくて、活動をしていない部活だったり、前まで在った部活ってなにかないでしょうか？」

「それなら確か、それなら一昨年に部員が居なくなつて、休部状態の部活が一つあるぞ」

思い出したように、手を叩く担任教師。

「それってなんですか!」

「オカルト研究部だけど、今は、部員1名つてとこかな？」
付けくわえるように言う、担任。

「部員1名? 一昨年から休部状態だったんですよね?」
それなのに、何で、部員1名なんだろうか?

「ああ、昨日、早々俺に、オカルト研究部の入部届けを出した奴がいるから、事実上は、今のところ一人だ」

そう言う事か。

「その一人って誰ですか?」

「ソイツは――」

黒い紙に、針で小さな穴を開けて見えた、一筋の光のような希望が見えた。

第19話 オ力研（前書き）

感想、アドバイス、お待ちしております。

第19話 才力研

そして、放課後。

ただいま部室棟の、三階の一番奥の部屋のドアの前に来いる。ここが、オカルト研究部の部屋らしい。今まで巡って来た部室の部屋の入り口の上には、文芸部とか、書道部とかのプレートが付いているが、この教室にはそんなモノは、付いていない。まあ、一昨年も前に休部したんじゃないや仕方無いが、だから今まで気が付かなかったんだ。てつきり俺は余りの部屋か、倉庫かと思っていた。

ドアの前に立っていると中から、物音が聞こえて来る。どうやらその昨日入部届けを出した奴は、中に居る見たいだ。

俺は軽く、コンコンとノックをすると中から。

「はい」

と言う、聞き覚えのあるような声が聞こえて来た。

一応、礼儀作法として、『失礼します』と声をかけ。中に入ると、そこに居たのは――鬼塚千尋だ。

部室は、奥行き6メートル、幅が4メートル位の部屋で、奥には窓が付いており、今まで回ってきた部室と、ほぼ同じ造りのようだ。違うのは、一昨年も前に廃部になったせいか埃の匂いがあること位だ。真ん中には、長机を二つくっ付けて並べてあり。その左右には、数個のパイプ椅子が収まっている。そして、鬼塚は一番奥、机の端にあるパイプ椅子に座って、分厚い黒い本を真ん中よりも先の所で開いていた。鬼塚の座っている近くの机にだけ、埃が付いて無いのは鬼塚が自分の場所を確保したからだろう。

読んでいた本を、パタッと閉じ、顔を上げ鬼塚は、

「あら、何のようかしら、昨日ヒーローのように現れ、頼んでも無いのに勝手に私を助けて、拳句の果てにいきなりその場に倒れ込んだ、愛田君じゃない」

俺の苗字を知っていた鬼塚。同じクラスだからかなのか、昨日在

った一件で名前を覚えたのか、どっちだろうと考えると、きっと後者の方だろう。そして名前を言うオマケ、いや、名前よりもそっちが本命のように言葉の矢をこれでもかと飛ばす。良くこんなに舌が回るなコイツは、いや、関心すべきは、そこじゃ無く、そこまで面識のない人間に、そんな言葉を浴びせられるモンだ。

「ああ、名前を覚えてくれてありがとう」

少し、皮肉をこめて、だが悟られない程度に俺は、言った。

「いいのよ、別にお礼なんて、大した事じゃないわ、類人猿の項目に一つ足しただけだから」

俺は、人間じゃなくて、霊長類の一種としか、アイツには見えて無いか！？

「あら、冗談よ、本気にしないで欲しいわ、例えばアナタがどれだけ、頭が悪くても、この学校に居るんだから、ホモサピエンスは、名乗っても良いでしょう」

あんまり、変わっていない気がするのは、俺のオツムが足りないせいなのだろうか。

「でっ、要件は何かしら？ 見た所によると、その紙に関係しているのでしょう」

俺の右手にある、入部届けの用紙を目をやり聞く。

「ああ、そうだ、これを――」

俺の言葉を止めて、鬼塚が、

「言わなくても、分かるわよ。果たし状ね、いい度胸しているわね。昨日の私の態度が気にいらなかったから、暴力での解決を図るつもりね、以外に男らしいのね、愛田君。流石、大の男5人を返り撃ちにするだけあるわね」

「なんで、俺がお前に果たし状を渡さなきゃいかねえんだよ！」

「あら、そうなの残念ね」

何だコイツは、そんなに俺が気に入らないのか？

「これだよ、これ」

俺は、腕を伸ばし入部届けを椅子に座っている鬼塚に見せつける。

「俺は、ここの、オカルト研究部に入りたくて、此処に来たんだよ」

「あら、そうなの。つまり私の下僕になりたい、そう解釈してもいいかしら」

「何故そうなる！」

俺とコイツでは、日本語の意味が異なっているのか、そう勘違いしてしまう。

「私が部長だからよ。嫌なの？」

不思議そうな顔の鬼塚。もう自分が部長だと、決まっているのは、椅子取りゲーム方式で早い者勝ちなのだろう。まあ俺には、興味の乏しい称号だが。

「嫌に決まっているだろう！」

そんな、DMな趣味を俺は、当たり前ながら持ち合わせていない。

鬼塚は、真剣な顔、鋭い視線で、

「だったら、早く、ここから立ち去りなさい」

声のトーンが、いや空気までも変わった。まるで、夏から冬いきなり変わったような――朝の陽ざしを見ていたら、突然、夜空になったような温度差。その鬼塚の口調は、今までの威嚇だったのなら、威圧に変わったかのように……さっきまでの冗談半分の口調じゃ無い。ここから先に近づくな、そう警告しているかのように、俺は聞こえた。

第20話 眼球VS本角

「これは、警告よ、愛田君。これから先、楽しい学園生活を送りたいのなら、私に関わらない方が良く。それがアナタの為にも、私の為にもなるのよ」

身の危険を感じるような、剣呑な目で俺を睨みつける鬼塚。

「なんでそこまで他人を拒む——」

俺がそう言いかけた時、素早くパイプ椅子から立ち上がり、まるで陸上の短距離選手を想わせるダッシュで、一瞬で俺に近づき、あの黒くて分厚い本を俺の左頬を目がけ、床と平行にまるでビンタをするように、右手を振るう。

凄いスピードだったが、本は、俺の左頬に触れるギリギリでピタッと、止まった。これも一種の言葉の暴力なのか！？

「こういう意味よ、分かった？ 私に近づかない方が良いという意味が」

汗が出た。冷や汗の言うモノだろう。俺は、全く動いていない。いや、動けなかった。その状態で沈黙の数秒が続く。

「あら、どうしたのかしら？ 愛田君。昨日のあの動きからして、これくらいの事、避けるなり、防ぐなり反撃するなり出来たと思うけど。避けるまで無いって事？」

少し、口元を曲げ怖い笑顔で喋る鬼塚。

そして触れていなかった、本が俺の左頬にそつと当たり、

「答えはでたかしら？」

質問しているようだが、コレは命令だ。さっきまで当たって無かった、本の無機質の冷たさが、恐怖心を与えるのに、一役買っている。

睨みつける鬼塚。俺はその眼を黙って見た。

人間の行動には、大概何か意味が在る筈だ、この行動は俺をこの部に居れない為だろう。だが、ここまでの行動をする為の何かしらの理由が在る筈だ。コイツの言動、行動は人を拒み拒絶している。何故そんな事をするのか――？　その仮説を俺は『立てて来ている』

「あのさ、毒の持つ生物って派手なのが多いって知ってるか？」

「なんの話よ」

頬に触れる本にさらに力が加わる。痛くは無いが軽く頬が凹む。

「まあ、聞けよ。それって、俺には毒が在るだから近づくなって言っているらしいんだ」

「知っているわよ、そうやって、自分が生き残る為でしょ」

「俺は、違うと思うんだよね、自分に毒が在るから、危険だから、危ないから、傷つけたくないから、近づかないで欲しいって言っているじゃないかと思うんだ」

「だから何？　アナタ何が言いたいのか？」

「お前はさ、そういう言動や、行動で自分には、近づかないで欲しいと思っているんじゃないのか？」

「！？　そんなの、貴方の思い込みでしょう！」

その言葉を聞いた鬼塚の瞳孔が開いたのが分かった、相変わらずの強気の状態だが、表情し少し悲しげに見える。

そう、これは俺の思い込みだし、きっと今コイツはとても迷惑し

ていると分かる。だけど、こんな悲しそうな顔をしている女子を放っておくのは、心が痛むし、勝つと分かっていたとはいえ、不良に絡まれた女子を黙ってみていた事に、罪悪感が俺の中には在った。

俺は、鬼塚が本を持っている右手の手首を軽く持ち腕を下げて、俺は近くに在った、パイプ椅子へと腰掛けた。

「話してみろよ、出来る事なら協力するぞ——」

俺が言葉を発し終わる前に、鬼塚が座っている俺に向かって踏みこみ、パイプ椅子の足を蹴り飛ばし、俺の体制を崩れたところへ、俺の右肩を掴んで押し倒し、俺は仰向けになるような形でその場に倒れた。

鬼塚は仰向けになっている俺に馬乗りになり、持っていた本の角を俺の左眼球に触れる寸前の所まで持ってきた。

第21話 5秒

鬼塚は仰向けになっっている俺に馬乗りになり、持っていた本の角を俺の左眼球に触れる寸前の所まで持ってきた。

一瞬の出来事。最初は、なにがなんだか分からなかったが、左目には黒モノが見えるだけだ。状況が分つたのは、残った右目が在ったおかげだ。

「立ち去る気になった？」

冷たい声で、鬼塚は良い放った。

しかし俺の言う事は決まっていた。何故だか解らない。コイツとは、まだ他人の筈なのに、

「俺は、お前を助けたい」

「アナタ迷惑って言葉知ってる？ 潰されたいの？」

「潰したいのか？」

淡々とした会話が続く。

「……出来るわよ」

そう、言った言葉と一緒に、左目に映る、黒いモノは、震えてて
いる。

「じゃあ、一つかけをしないか？」

「かけ？」

鬼塚は、眉を少しだけ動かす。

「ああ、俺は、これから5秒数えたら、頭を一気に起こす」
動揺した顔で鬼塚が、

「それじゃあ、目が――」

「そう、潰れるよ」

「お前が、その本を動かさなければ、お前の勝ち。動かしたら俺の勝ちだ」

「!？」

何を言っているだコイツは、と思っている事が表情から読みとれた。まあ、俺だって逆の立場だったらそう思う事だろう。

「お前が勝ったら、俺は黙って、入部を諦める、そして、俺が勝ったら、入部を認めて貰うのと、お前の他人を拒む理由を教えてもらおうか？」

どうする？ と軽く挑発的な口調で付け足した。

「いいわ、乗ったわ、そのかけ」

少し口を曲げ、嗤いながら鬼塚は答える。俺も嗤う。そんな事出来る訳ないだろうと思っているのだろう。

そして、俺は少しの静寂の間を置き、軽く深呼吸をしてから、カウントダウンを始めた。

「5——4——3——」

震える、首。力が入るか分からない程震えている。だが、もう後には引けない。そして、左目に映る小さな黒いモノも俺と同じように震えている。怖いんだ、どちらも、俺も、鬼塚も。

「2——」

何故ここまでするのか？ 理由は解らない。最初は、ただ単にループを回避したい、の気持ちでこの場所に来ていた。でも今は、そんな理由では無いと思う。そんな単純な話では無く。もっと複雑な何かが俺を動かしている。

「1——」

そして感じていた。コイツは良い奴だと。

「0」

俺は、0と言った瞬間首を起こした、本の角は、俺の頬をなぞる

様にしかすって行つた。鬼塚が、ギリギリで本を動かしたんだ。

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ」

部室に、二つの粗い呼吸音が響く。俺は、一応左目を触って言った。自信ありげに、でも、たどたどしく。

「俺の勝ちだな」

「どうして、そこまでするの？ 赤の他人でしょう。」

呆れた様子で言つた、軽く涙目になっていた。でも嬉し悲しそうに、様々な感情が籠っている。

「しらねえ」

脱力的に、短く返した。

第22話 理由

「アナタみたいな馬鹿初めて見たわ、アナタはお人よしの良い人？」
いや、俺は此処まで来るのに、オカルト研究部の存在を知ってから、『12回』もかかっている。つまり今、『この4月7日は、37回目』だ。

最初に、眼球寸前に本の角を突きつけられた時は、すぐに、その場から逃げだしてしまった臆病者だ。それでも、俺は続けた、オカルト研究部に通った。最初はループ回避という名目で通っていたが、今ではきつと、他の感情が動かしている。確かに俺は、コイツ、鬼塚の事をほとんど知らない。けど、俺は助けたいと思った、この他人を拒絶する少女を——俺は良い人でも何でもない。勝てると思っていたとはいえ、女の子が、不良に襲われている所を黙って見ていた時もあったし、ここまで持つてくるのに12回もかかってしまっている。そんな奴を良い人と呼ばれる事に俺は少し胸が痛んだ。

鬼塚は観念したようで、馬乗り状態を解くと、そこに座れとでも言うみたい、本の角で長机の近くに在るパイプ椅子を指す。

それを読みとった俺は、そのパイプ椅子に腰かける。鬼塚は、俺の方を向いたまま、立ったままだ。

「仕方ないわね……何処から話せば良いかしら」

鬼塚は、一呼吸を置いて話し始める。

「全ての始まりは、5年前のクリスマススイブの日。あそこから、始まったわ」

「5年前のクリスマススイブ。12月24日、その日私が見たのは、真っ赤なサンタクロースじゃなくて、真っ赤な炎だった——出火原因はストーブの消し忘れらしいわ。それで私の家は、炎に包まれたわ。家は全焼。両親は二人とも焼死。家族で私だけ、通りがかった人に助けられ、生き残った。そして、これが両親の形見」

鬼塚は、黒い本を手にとる。

「科学な好きな私が、物理の教師をしていた父親に頂いた本。コレなんの本だか分かる？」

俺に本の表紙を見せるが、英語で書いて在り俺には読めない。

「これは、相対性理論、一般相対性理論、特殊相対性理論を訳しまとめた論文書——それから両親が亡くなってから、私はこの本必死に読み漁ったわ、毎日、毎日、毎日。何でか分かる？ 愛田君」

俺は数秒考えたが、分からなかった。そりゃあ、相対性理論なんて名前は聞いた事はあるが、具体的にどんなものまでかは、俺には分からない。

鬼塚は窓際まで歩くと、開いていた窓から流れ込む春風を浴びて少し、腰上位まである長髪を靡かせながら、

「私は、過去を変えるの」

決意の表れ、その感情が読みとれた。

「私の目標は、情報、または、人間が過去へ行く事の出来る、理論を完璧に証明して、その技術の確立をし、あの日の出来事を無くすること」

「そんな事、出来るのか？」

「出来る、出来ないじゃなくて、やるのよ。愛田君、ニュートリノって言う粒子を知っているかしら？」

確か、数年前に話題になった事がある名前だな。名前は知っているかどんな物までかは俺の頭には入っていない。

「ニュートリノという粒子は、光よりも速い粒子として、発表されてこれを使えば情報を過去へ送る事の出来るじゃないかと、示唆されている。私は、それを始めとする理論を完璧に確立するの」

コイツのやりたい事は、大まか理解出来た、だが、
「それと、お前が他人を拒む事と何が関係在るんだ？」

鬼塚の顔が少し、ほんの少しだけ歪んだ。一瞬表情を押し殺した

ように。

「私は、この本に書いてある理論を、3年かけて理解した、死に物狂いでね」

鬼塚は、遠い眼で窓の外を見ながら、

「変わり者は、嫌われるのよ」

悲しそうな声だった。悔しそうな声だった。寂しげな声だった。

第22話 チャイム

「変わり者は、嫌われるのよ」

悲しそうな声だった。

寂しそうな瞳^めをしてた。

悔しそうな声だった。

悔しそうな瞳^めをしてた。

寂しそうな声だった。

悲しそうな瞳^めをしてた。

変わりモノは、嫌われる。確かコイツは、5年前からこの本を読み始めたんだよな、てことは、小4——変わりモノは嫌われる。それは知っている。集団に染まらない者。周りと違った者。恵まれすぎた者。何かと、理由を付けては、嫌われ、疎まれ、蔑まれ、嫉まれ、恨まれ、そんな奴が多くなるにつれて連鎖し、さらに拡大する。小4であんな本を読み始めたら、周りから浮くのは、火を見るように分かる。

「それでも、仲の良かった友達は居たけど、私と一緒に居るだけで、周りから白い目で見られるようになったわ」

「じゃあ、お前は、友達の事を想って、自分から他人を拒絶するようになったのか」

その問いに鬼塚は、

「違う、私は自分の為に拒絶したの、邪魔だったから、知識を得るほうが大切だったから！」

珍しく感情的な声になって否定する鬼塚。だが俺には、それは嘘を言っているしか聞こえなかった。別に他人の嘘が見破れるとかそんな能力など持ち合わせちゃいないが、鬼塚の表情、声、言動からそう解る。

「嘘だろ」

あつさりと返し。続けて俺は、

「お前それが他人の為にも、自分の為にも、なると思うなよ」

鬼塚が、友達の事を想って拒絶をすれば、その友達の周りから白い目で見られる事はないだろう。だけど、そうした事によって友達は、悲しんだ筈だ、それを選んだ鬼塚も。この方法じゃ、誰もハッピーエンドは迎えられはしない。その事は、他人の俺よりも、中心の人物である、鬼塚が一番解っている筈なんだ。俺に言われるまでも無く。

数秒間、部室に沈黙が生まれた。

「だったら、どうしろって言うの？ 友達の事も気にもせずに仲良くしていれば良かったって言うの！？」

確かに、鬼塚の行動は、正解とは言えない。でも、赤の他人の俺に間違っていると言う権利も無いかもしれない。現に今の俺にその時どうしたら正しかったのか、その答えも見つからないが、だが、今これだけは言える。

「確かに俺には、その時の正解は、解らないけど——今もそれを続ける必要は無いだろ。友達欲しいんだろ？」

鬼塚は、その言葉を聞いて固まっていた、いや正確には、頭の中で色々な考えを巡らせていたのかもしれない。

そして、数秒後、鬼塚の口がそっと開く。

「欲しく無い訳無いじゃない……」

「じゃあ、部員として友達として、この部に迎えてくれないか？

白い目なんて気にする事じゃないし、今じゃ、その時と環境も随分違うだろうし、逆に見られても、見下してやればいいさ。ソイツらが嫉妬する位に、楽しく過ごせば良い」

言い終わってから、長い沈黙が流れた。でも実際には、10秒位しか無かったよだが、時が止まっているかのように長く感じた。きつと鬼塚も同じが、それ以上の時間を感じていたのかもしれない。

そして、吹っ切れたように、今まで繋いで在った枷が千切れたように、鬼塚は、笑った。嗤ったんじゃなく、笑顔で。

「あはははっははっは。本当にアナタは馬鹿みたいね、訳の解らない自論を掲げて、私の今までして来た事を否定するなんて——」

窓際から俺の元へと、歩いていきながら、机に在った入部用紙を掴み、俺の顔の前へと着き出し。

「解りました、入部を認めましょう——宜しく。愛田君」

その瞬間、止まっていた時が、動き出したのように、チャイムが鳴り響いた。いや、きっと本当に時間が動き出したんだと、俺は感じた。

第24話 一時停止

それから、俺と鬼塚は、部室の真ん中に並んでいた机を挟んで座り取りあえず会話を始める。

「で、アナタは、なんで、オカルト研究部に入ろうと思ったのかしら？」

鋭い質問だ。だが、此处で、ループしているからなんて言っても、アレなので、

「いや、SFとか都市伝説が好きだからだよ」

鬼塚は、フーンと頷いて俺を見る。余り納得は、していないようだ。

「まあ、良いわ」

「じゃあ、お前は どうしてこの部に入部したんだ？」

「まだまだ、タイムトラベル、時間移動、なんて事は世間一般的に見て、オカルト扱いだからよ、これから色々調べるのに、学校の施設を色々使いたいし、私は収入が余らないから、新しい論文なんか出たら、部費でまかなうつもりだったのよ。まあ、一番の理由は、人がいなかったから、オカルト研究部は、実際はたまたまたったのよ」

収入が余り無い。両親が居なくては当たり前なのだろうな。

「成程な……学費とかはどうしているんだ？」

嫌な質問だったかも知れない、口が滑ったと言ってから思った。

「私は、貴方とは違って優秀だから、学力特待で学費はかからないの。この学校を選んだのはそれが理由よ」

この学校にそんな制度が在ったとは知らなかった。まあ、俺には関係ないが。

「お前は、頭が良いんだな」

「そうよ」

自信満々に返すが、俺はコイツが気付いていない、重要な事実を知っていた。そりゃ、30回以上も4月7日を繰り返しているから知った事だが。

「お前、知らないだろう?」

「何の事かしら」

「正式に、部として活動するには5人は必要なんだと」

「……」

硬直していた。まるでテレビのリモコンの一時停止を押したかのうに。もう2度と見れないかも知れないな、こんな鬼塚の顔は。

「愛田君、アナタなんとか出来るかしら?」

「なんとかするさ、楽しくやろう、オカルト研究部」

「ええ、でも無理しなくても良いのよ、名前だけの幽霊部員でも構わないから」

「いや、ちゃんと、部員を集めるよ」

そんな話を話して、俺のオカルト研究部の初の部活動? は終了した。

そして、ただ今。我が家の二階の一室である自分の城のベッドに腰をかけて、掛け時計を見上げる。時刻は、日にちをまたいで、零時を数秒程回ったとこだ。絶対の確信が在った訳じゃないが、思った通り、ループは起きなかった。

そこへ、手元へ置いておいた携帯かメールを着信したらしく震え

る。メールを開くと、

From 不明

Sud

ループ終了

と書かれていた。思わずそのメールを見て、苦笑する。

ループ終了か……素直に喜べないな。これで終わったとは思えない。行動には、大概何らかの意味が在る筈だ、4月6日、7日の出来事の意味は、俺にはさっぱりだ。てっ事は、これから何かの意味が生まれて来るかもしれない。

そんな事を考えてから俺は、眠りについた。

第25話 4月8日

次の日。 4月8日。

その日の朝は、久しぶりに目覚まし時計で起きる事が出来た。つまり、普通に4月8日を迎えられ、なおかつ、あの宛先不明のメールが来なかった事になる。

リビングで朝食を食べていると、いつも以上においしく感じられる。なんせ、37回も同じ朝食のメニューだったのだから、オカズの焼鮭がとても美味に感じる。

そんな事を考えて食べている時、テレビの音声に耳が行く。俺の住んでいる町の名前が聞き慣れた女子アナの声から出たからだ。

内容は、昨日の夜この町で自動車の破損があった事。ただの普通の破損ならば、こんな全国ニュースで伝える事じゃないだろうが、破損の仕方が異常だった。人通りの少ない路地に止まってあった普通の黒色の乗用車が、1時間目を離れた隙に逆さまになっていたと言っただ。

ニュースの映像だと、タイヤの面が上になっていて、車の屋根が潰れて地面に着いている、まるである程度の高さから、落としたように。なかなかシュールな映像だ。どうやら重機を使った形跡も無く、警察もどうしたらこうなるのか捜査中らしい。

まあ、俺的にはそこまで興味を惹かれる内容では無かった。ここ2日でもっと奇妙な体験をしているからだ。もしかしたら、タモ〇さんのあの番組に投稿したら、採用されかねないレベルかと思う。それに、駐車禁止の場所に駐車していた、運転手も悪いんじゃないのかと、軽くツツコンでもみる。

家から出て、すでに通いなれた通学路を自転車走らせる。

新入生。ピカピカの高校1年生。

学校三日目にして、登校は41回目。

新鮮さなんてモノは、微塵も存在していない。

学校へ向かう途中で見かける、新入生らし人達を見ると期待に胸ふくらませているような顔の人達が沢山居る。

少し羨ましく、少し寂しく感じた。

学校の校門の手前で来た時、俺は自転車を一旦止めた。理由は、『また』あの子を見つけたからだ。俺の来た道とは違う方向の道路でたたずんでいる、一人の少女。髪は鬼塚よりも短く、肩位の長さの女の子だ。校門からは、30メートル位は離れているだろうか、その子はウチの高校の制服を着て、道路の端で、学校を見上げていた。

俺はその子に見覚えがあった。別に名前を知っている訳でもなく、クラスが一緒と言う訳でも無い。勿論話した事も無いけど、知っていた。それは、4月7日。俺が37回繰り返したあの日、毎日？毎回、今居るあの場所で立っていた女の子だからだ。

俺がループしている時に分かったのは、基本的に何もしなければ、俺の周りで起こる事の変化は無いと言う事、例えば、クラスの誰かが話している内容や、行動に変化は殆ど見られなかった。変化がよく見られたのは、俺とよく一緒に居た利一と、鬼塚位だ。利一に話す話題を1回目の2回目に変えれば当たり前だが、利一の返す言動、行動は変わる。鬼塚に至ってもそうだった。どうやら前回の記憶を持つている俺が干渉する事により、世界も変わってくるみたいだった。前回の記憶を持つているから、全く同じ行動をするのは不可能だが、もしそれが可能ならば、きっと全く同じ事が起こるだろう。

あの女の子も周りの人達同様に、4月7日、俺の知る限り26回ずっとあの場所へ立っていた。だからこそ俺は、あの場所に立っているだけの行動に違和感を覚える事が出来た。俺が学校に早く着くうが、ホームルームギリギリ間に合うかどうか分からない時刻に着いても、あの女の子は、あそこに立ったままだ。俺の予想だと、学校のすぐ近くまで来ているが、学校には、『入らない』そう思った。

これは、おかしい出来事なのだろう。『来ているのに』、『入らない』、おかしいとは、思ったがそこまでは、気にはしなかった。それがあの女子の4月7日のする事なのだろうと思ったからだ。その日だけ、たまたま、そんな日だった。そう思った。でも今日も同じ場所に立って校舎を見上げている、その少女は、こちらに気付いたのか、一度俺の方を見て、学校から離れて消えて行った。

第26話 教鞭

高校の授業と言うモノは、難しい。特に英語や数学などの項目は、俺にとつてのハテナのオンパレードで、その言語や公式が睡眠導入剤に感じられる。

今は午後の授業に突入し、あと1時間で今日の勉強は終わり、つまり6時間目だ。

この授業は誰一人として、教科書を開いてはいない。

別にクラス全体で授業放棄という文部科学省や教育委員会を敵に回すような事をしている訳ではなく、担当の教師が開かなくても良いと言ったからだ、その教師は白衣を着こなしている『辻』、4月6日に保健室へ俺の事を見舞に来た、まだ若い男性の新任教師だ。物理の授業は、コレが初めてと言う事もあり、最初のうけが重要かと考えてか、教科書には載っていない内容を話している。

教卓の後に立ち、教卓に両手のひらを付けて、若干前屈みになりながら、話しをする、辻。

「えー、今日は初めてという事もあり、皆が興味を湧くような話をしたいと思います」

若手教師らしく、元気の良い声で言う。

「例えば今、皆の机の上に輪切りのレモンがあるとすると、とても酸っぱそうなレモンだ。そう、イメージすると、唾液の量が増えてくると思う。これは条件反射と言って、君達がレモンは酸っぱいと知っているからこそ、起きる現象だ。もし、レモンを知っている人に見せてもそれは起こらない、条件反射とは、先天的に宿っているモノじゃなく、後天的な影響によって起きる現象だ」

黒板に黄色のチョークでレモンの絵を描いたり、中々クラスの心を掴んでいる。余り物理（勉強全体）が嫌いな俺でも興味が湧く内容だから、新米にしては中々やるなと上から目線で感心して見る。

「このような、人間の行動は、脳の電気信号によって行われている。このクラスには居ないとは思うけど、世界には、面白い人達も存在している。一つの刺激で複数の感覚を得られる人達だ、例えば、文字を見て色を感じたり、歌を聞いて味を感じたりする人達も居る、この現象は、『共感覚』と言うんだけど、まだ解って無い事も多いんだけどね。つまり人間の脳は複雑で色々な刺激を感じ易いと言う訳だ」

何故が、その時、辻と目が遭った。

「ここからは、僕の仮説ですが、人間は五感に頼って、情報を得ているけど、それは全て脳の中の電気信号によって行われるってさっきも言っただけ——電気信号さえを完璧に解明すれば、一つの情報で幾つもの情報が送れるかも知れないと言う訳だ、例えばある歌や曲を聞いて、楽しくなったり、悲しくなったりするのは個人差は在るが、ある種の電気信号を操っていると云っても良いかもしれない。これをもっと複雑にして、個人の脳に干渉出来るようにすれば、曲ならば、音、リズム、テンポなどの事を調整すれば、頭の中にダイレクトで様々な情報が送れるようにり、聞いた人に命令なんかも出来るようになるかもしれない——」

中々の好評を得た辻の授業が終わり、放課後。

俺は、オカルト研究部の部室に赴き、現在いたる所に埃や汚れが溜まっている、この空間を部長と共にジャージ（体操着）に着替えて掃除中である。

第27話 3人目の部員

中々の好評を得た、辻の授業が終わり、放課後。俺は、オカルト研究部の部室に赴き、今、いたる所に埃が溜まっている、この空間を部長と共にジャージ（体操着）に着替えて掃除中である。

ジャージ姿で床を箒で穿いている鬼塚が、

「ところで、愛田君。部員の方はどうかしら？ どうやら担任に聞いてみたら、部費を申請するには、5人以上を揃えて、正式に部として認められないといけないらしくて」

俺 は汚れが溜まった窓を雑巾で拭きながら、

「ああ、取りあえず今のところ、一人は決まってる」

「そう、一体どんな人かしら、愛田君の友達？」

「まあ、一応そうだな」

そっけなく俺は返す。

「それじゃあ、余り期待はしない方が良いわね」

少し感に触る言葉だが、

「ああ、期待しないほうが良い」

そんな事を話していると、廊下を走って来る足音が聞こえて来た。
「来たか」

そして、勢い良くドアを開ける、掃除機を持った利一が居る。

「おーす。千秋、持って来たぞい！？」

その姿を見た、鬼塚は、素早く利一の左に移動し、箒の持つ棒の部分で利一の首の下へと潜らせ、平静な口調で、

「愛田君、大変よ、不法侵入だわ。いますぐ正当防衛に移らなくちゃいけないわ」

驚愕した顔で、俺の事を見て、

「ちっ、千秋、何だコレ、掃除機じゃなくて、葬式だったのか！？」

「……、」
「……、」

まるで、突き刺さるような、冷めた目を送る俺と鬼塚。

「愛田君。この人、綺麗に消していいわよね？ 掃除の時間だし」
顎の下に潜らせてある、箒の柄の部分を首に当て、力を込め始める鬼塚。

「まあ、待てよ」

俺は、二人の元へ近づき、鬼塚の箒を利一の首から離すと、

利一を長机の前へと連れて行き、学生鞆から、入部届けの用紙を長机に置く。

「なにコレ？」

入部届けには、すでにオカルト研究部と書いてあり、記入欄の残りは名前の判子のみだ。

「利一、お前に選択肢をやる。これから俺の言う言葉に、『ハイ』か『分かった』、『イエス』で答える」

「えっと、それって、選択肢と言うのか……？」

俺は、軽く笑いながら、

「選り取り見取りだろ、好きなものを選べ。なんなら、『OK』、『了解』、『把握した』、も付けくわえてやるぞ」

利一に長机に置いてある、入部届けの用紙を指さし、
「つまり、この部に入れと、そう言っているのか？」

「ああ、その紙に名前を書いて、この朱肉を使って拇印をしろ」
そう言っつて、家から持ってきていた、朱肉を利一に見せる。

「千秋も入ってんの？」

「まあな」

「じゃあ、俺も入るか」

意外にあっさりと了承する利一。

なんかつまらない。折角無理やり入部させるつもりで朱肉まで持って来たというのに、これじゃまるで俺が馬鹿みたいじゃないか。それに、入部動機が俺が入っているところが、相変わらず気持ち悪い。

名前と書判を記入した利一に、利一に雑巾を渡す、

「ん？」

「今、部室の掃中だから、お前雑巾がけな。俺、掃除機使うから」

利一が持つて来た掃除機を掴み、鬼塚の方に行つて、利一の事を親指で指さして、

「アイツが、佐伯利一、俺の悪友だ、取りあえず部員3人目つて事で、ヨロシク頼むわ」

それを聞いた鬼塚が利一の顔を見て、

「としかずね、ダイオキシンみたいな名前ね」

「はあ！？ 都市ガスつて事か！？」

利一が素早く振り向く。

「あら、お気に召さなかったかしら、だったら、オゾンか、硫化水素の方がよかったかしら」

はは、良し勝ったな、俺は、最初に霊長類つて言われたからな、気体ならコッチの方が上だあ？ アレ？ 何か悲しいな、なんだろう、この複雑な気も持ち……。

「おい、人を有害たいに言うなよ！ なあ、千秋！」

「俺にとつてお前は、有害だからな、もしゴミに出す時があれば、肥料として有効に使つてやるから安心してくれ、時代はエコだからな」

そこへ鬼塚が、

「愛田君、駄目よそれじゃ、それで育てられた植物は汚染されてしまうもの」

確かに、有害な者を肥料には使えないか、妙に納得してしまった。

「おい！」

それからぎゃーぎゃー利一も言っていたが。まあ、なんとかなりそうか。俺は、二人の言い争っている姿をみてそう思った。

そして、下校時間寸前までかかって、今日中に部室の掃除を終わらせるが出来た。

部室、学校を後にして、鬼塚とは途中の道まで一緒に帰り、これから利一と、多分この国で一番フランチヤイズチェーンとして展開しているであろう、ハンバーガーショップへ行く事にした。鬼塚にも『一緒に行くか？』と誘って見たが、『いいえ結構よ』と言って帰路へと着いた。

第28話 エムどナルド

ハンバーガーショップは、時間帯の所為か、学生服を着た若者で賑わっていた。俺はフィッシュバー〇ガーと、黒い炭酸ジュースを頼み、利一は、ビック〇ツクと、ポテト、と俺の同じ飲み物をセツトで頼み、品を受け取って、窓際の5番テーブルへと向かい合って座った。

ストローでジュースを少し飲みつつ利一は、

「結局、オカルト研究部って何するんだ？」

俺はバーガーを食べながら、

「俺もよく分かんねえ、鬼塚は、自分の調べたい事があるから、それを調べるんだろうけど」

「調べたい事って何だ？」

俺はその質問をどう返すべきか迷った。過去を変えたいという願い。その理由は、両親を救う為。その事を俺が第三者に言っているものかどうか……

「まあ、色々だよ」

俺はお茶を濁す形で答えた、利一も余り言いたくない事なのかと気づいたのか、「そっか」と軽く呟いた。

「千秋、お前鬼塚に惚れてんの？」

その言葉を耳にして、俺は『ぶッう』っと口に入っていた物を吐き出しかけた。ジュースを流し込んで、口と頭を冷静にして。

「そっ、そんなんじゃないよ」

「アレ？ だから千秋入ったんじゃないのか、オカルト研究部に」
平然とした口調で、普通の感じで聞き、ストローを口に咥える利一。

「違っよ」

何て答えればいいのか。最初はループ回避の名目でオカ研に入ったが、途中からは、鬼塚を助けたいという名目が変わっていた。

そして、鬼塚から異様な感覚を感じていたことがあった。それが何なのか分からないが『今はその感覚は感じられなかった』だから俺は、この感覚がどういうモノか分かったのかもしれない。

「なあ、利一、話しが変わるけどさ」

「ん？」

「初めて逢ったにも関わらずに、ソイツの事をずっと知っていた、知っている感覚があつて、それは『昨日』までで、『今日』は感じないってどういう事だと思う？」

自分でも言っていて何を言っているんだと思ったが、そんな事が実際にあの二日間にあった。

「それって、既視感とか、デジャブって奴じゃないか？」

「そうかもしれないけど。『今日』は全く感じられないってなんなんだろうな」

「それって、鬼塚の事か？」

俺は、そっけなく肘について、窓の外の行き交う人々に目をやりながら『さあね』呟く。

ファーストフードを食べ終わり、それぞれの帰路へと向かった、俺と利一だったが、利一と別れて、自転車を本腰入れて漕ごうと思った時、携帯に一通のメールが届いた。

自転車を止め、携帯を開くと新着メール一件。時刻は、7時32分。開くと、

From 不明

Sud 『急げ』

学校へ戻れ。

それを見た俺は、自転車を進行方向逆へと走りさせた。目的地は
勿論学校だ。

第29話 アイキャンフライ

From 不明

Sud 『急げ』

学校へ戻れ。

それを見た俺は、自転車を進行方向逆へと走りさせた。目的地は学校だ。

宛先不明のメール。俺の日常を非日常へと変えたのは、宛先不明のメールだ。だけどコイツは、敵では無い。むしろ俺の事を助けているんじゃないだろうか？ メールがあつたからこそ俺はループを回避する事が出来たし、不良をやっつける事も出来た。このメールを送り付ける詳細は不明だが、悪い奴ではないだろう。

学校へ自転車を走らせ、学校から100メートル程離れた所である物を見つけた。

「ん？ 通行止め？」

工事中、騒音注意と書かれた、通行止めのフェンスと赤いランプが道を塞いでいた。

「おかしいな、工事なんて話し聞いて無いし、なにより工事している様子も無い」

フェンスの間を自転車を走らせ、校門まで行くと、校門の柵は開いているが、此処にも同じように、フェンスと赤い工事中に使うランプが置かれていた。

俺は自転車を校門の前に置き、学校の敷地内へと入る。

静かな学校だった。昼間と同じ空間とは思えない位だ。どうやら学校には俺以外、誰も居ないらしい、教員の車は無いし、時刻はもう8時に近いだろうから、勿論残っている生徒居ない。暗く音の無い学校は、薄気味悪くさえ感じた。

校門を入れて数歩、歩いた所でまたメールが届く。

それは添付ファイルが添えられている。

From 不明

Sud 『身体機能強化』

ダウンロードしろ。

？ コレは、前の格闘技と同じやつか？ 身体機能強化？

取りあえず俺は、あの時と同じように、ファイルを開き、右耳に付けると機械的な女性の声が聞こえて来て、

「ダウンロードファイル『身体機能強化』。使——」

その時だった、何処からか音がした、人の歩く音のような音。その音がしたのは、右でも左でも無い、後ろでも前でも無い。『上』だった。

携帯を右耳に付けたまま、校舎を見上げるとそこに——30メートルはあるかと思う屋上のフェンスの外側に立っている制服を着た女の子が、空中に一步を踏み出した。

そして重力へしたがって落下を始める。

「なっ!？」

それを見た瞬間俺は、落下地点に向かって走り出した。間にある距離では無い。その地点まで50メートルはゆうにあるだろう。でも走りだした——本能で。

三歩程走りだした時、右耳に付けたままだった携帯から、『使用制限10分』さっきのファイルが言い終わると、体に変化が起こった。

踏みだした足が地面を抉った。まるで柔らかい土の上を走った時のように。だが、ここはアスファルトで舗装されている地面だ。それを抉ったのだ。人間の足跡だと形が分かる位に抉られた。その力の推進力は、前へ前へと行く。もしかしたら、自動車よりも速いかも知れない。たった数歩でその落下地点へと辿り着く事が出来た。

まだ女の子は、空中に居た。なにか行動をするなら十分の時間がある。だったら俺がする事は、
両手を構える。

空から降って来る女の子に対してこの行為は、間違いでは無いだろう。だが正解でも無いだろう。きっと普通の人を受け止めれば、重力落下で大きなベクトルを持った少女を受け取められずに、両腕の骨が折れ、少女は地面に叩きつけられるパッドエンドが待つだろうが、俺はどうやらそのルートには行かないで済んだみたいだ。

俺の両手には、お姫様抱っこのような形で受け止められた少女が居た。目には涙を浮かべている。

この子の顔を良く見ると見覚えのある顔だった。

『昨日も今日も学校から少し離れた所で立っていた少女だった』

第30話 天使

この子の顔を良く見ると見覚えのある顔だった。

『昨日も今日も学校から少し離れた所で立っていた少女だった』

そして思ったよりも、衝撃が少なかった事に対して少し戸惑っている。脳の予想とはかけ離れた感触。体に痛みは無い。

どうやら、俺もこの子も無事みたいだ。

首を動かした少女と目が在った、少女は現実には無い物をみたように目で、

「ど、どうして」

そう呟いた。

「だっ、駄目。触らないで、あっあ、きやああああー!!」

そう少女が叫んだ瞬間、その場に衝撃波のようなモノが発生した。俺は50メートル程吹き飛び、サッカーゴール位しか無い校庭に風に飛ばされた丸めた紙のように転がった。

「ぐっっ」

転がったのは、俺だけだった。少女はその場から動かず、立っている。

少女を中心に爆風が起こったのが分かる。少女を中心アスファルトで舗装された地面は直径3メートル程丸く、円のように剥がれ、近く植えられていた木々は超大型台風の暴風にやられたように、根っこから倒されている木もあれば、幹が折れてしまっている木もある。さらに少女に近い位置にある窓ガラスは粉々に割れていて、きつと室内に散乱していることだろう。

転がった体を起こし体勢を整え少女の方を見ると、俺が言うのも何だが、物理法則を無視した状況になっていた。

俺のさっきの力は、屋上で不良に絡まれた時と同様に、あの携帯のファイルが起こしたのだろうが、まだ携帯のあのファイルのせいという曖昧理由だが少しは理解が出来た。たが今の少女は、全く理

解が追い付かない。何故なら両足が30センチ程地面に離れ空中に浮いているのだ。

「おっ、おい、どうしたんだよ!!」

俺の戸惑った叫び声に、反応したのか今にも途切れそうな声で、
「に、に、げ、て」

と言った次の瞬間、少女が『うあああああああああああああッ!!』大きく叫んび、その声に合わせるかのように、俺から見える校舎の全ての窓ガラスは、一斉に四方に粉々に弾けた。

だが、そのガラスは、重力と言う地球の物理法則に従って落下する事は無かった。少しの間空中に漂っていたガラスの破片は、少女の背中に集まって行きある形を作り出す。

「っ、つばさ？」

彼女に集まったガラスの破片は、片方で2メートルは超えそうな翼、動物で例えると白鳥のような翼だ。だが、今この状況だともつと良い例えが俺の脳裏に浮かぶ。

『天使』

そう、まるで天使のようだった。そしてその言葉を再現するように、絵画に描かれた天使を創るように、空中にあったガラス片が無くなり翼が出来あがると頭の上に輪が現れ完成した。世界中に点在する天使の絵画は、この少女を見て描いたのではないかと思う程に、少女は『天使』に見えた。

第31話 女の子の武器

そう、まるで天使のようだった。そしてその言葉を再現するように、絵に描かれた天使を創るように、空中にあつたガラス片が無くなり翼が出来あがると頭の上に輪が現れ完成した。世界中に点在する天使の絵画は、この少女を見て描いたのではないかと思う程に、少女は、『天使』に見えた。

だが、今はのんきに見とれている場合では無い。この状況で俺はどうすればいい――

左肩に異和感が走った。

次に来た感覚は、激痛だった。

「なっ！？ うあああうああッ！！」

制服の学ランの肩の部分に穴が開いている。正確に言えば身体、体にも穴が開いて、血が滲んできていた。

咄嗟に後ろを振り向く、この状況で少女から目を離した判断はきつと間違いだ。けど、何がどうなったかを知りたかったのだ。そこに在ったのは校庭に突き刺さる月の光に反射して輝く長さが50センチ程の槍。槍と言っても太い物じゃなく、弓の矢程の太さの物だ。その槍は俺が見てから1秒も経たない内に粉々に砕けた。砕けた槍の正体は『ガラスの破片』だった。

ハッと慌てて、少女の方を見ると、一步、一步こちらに近づいていた。無表情で涙を流しながら。意識が無いようにも感じられる。

歩いてこちらへ向かってしている少女の頭上周辺には、先ほどの槍と同じ物が20個程展開している。

こっ、コイツがやったのか！？ そう理解したと時に、少女が右腕を上には挙げ振り下ろすと、頭上に浮かんでいた2本の槍が物凄いスピードで俺を狙い飛んでくる。

普通ならば、一步も動く事も無く俺の体を貫いているだろうが、今の俺には動ける程の動体視力と反射神経が備わっていた、理由は

勿論、さっきのメールのおかげだろう。

それでも、バッテリーセンターの最速のマシンよりも速く感じる。

何とか、右へ跳び避けると、地面に槍は突き刺さり、さっきと同様に粉々に砕ける。

ちくしょう、どうすればいいんだ、今俺の目に映っている光景は、日本の映画どころか、ハリウッド映画のワンシーンと言われても信じてしまうような光景が広がっていやがる。さらに俺に近づいて来る少女との距離は、最初の50メートルから、40メートル程まで迫って来ている。

今の身体能力なら、全力で走れば逃げられるか？　と思い足に力を入れようとするがその行動は逃げるとは別の思考で止まる。

ここで俺が逃げたらあの子はどうなるんだ？　あんな状況で他の誰かに見られてみる、それこそ警察が来て発砲されても可笑しくは無い状況だろう！

来る途中に在った、工事中の標識のせいで学校に近づく人が少ないせいか、まだ誰もこの異変に気づいていないみたいだが、いつまでも放って置く訳もいかない。女の子の為に。

「どうにかして、止めないと――」

でも、どうやって？

自問をしたが、自答は出なかった。

そんな時、携帯が鳴った。メールだ。宛先不明の。

俺は、少女を気にしながら、すぐ開き目を通す。

From 不明

Sud 『制御ファイル』

『制御ミュージック・コントロールプログラムファイル』

聞かせる。

そのメールを見て、少し口がにやける、単純に何とか出来るかもしれない方法が見付かって嬉しかったのと、自分が此処へ呼ばれた理

由が解つたからだ。

貫かれた左肩を押さえながら、呟いた、

「——全く、女の子の泣つてのは、武器だよな。悲しい男の性だ」
震える自分を激励するように、言い聞かせるように、声に出した。
俺が此処へ呼ばれた理由は——この子を助ける為だ。そう確信した。

第32話 少女

少女はじょじょに近づいて来る。遠距離の武器を持っているのに、近づいて来るのは他にも何か武器があるのか、それともそこまで思考がいつてないのか。でもどうやら、少女の狙いは、俺のようだ。

俺が死ぬのを邪魔したせいだ。

たまたま、居たのが俺だからか。

俺が止めようとしているのを解ったからか。

理由は解らない。でも少女が俺を狙っているのは解る。これはきっと、直観や本能といったモノだろう。肉食獣に狙われている、草食動物はこんな気持ちではないかと思う。さしずめ俺はシマウマで向こうはライオンと言った所だろう。

笑いがこぼれる。苦笑いだ。

一直線に俺の方向へ歩いて来ている少女の顔は、生気を感じられないほど無表情だ。まるでロボットのようになく表情な顔に似合わない涙を流している。恐らく普通の意識は、無いだろう。さっきの『逃げて』と言う言葉からして、さっきの女の子と違う思考で動いているのか。とにかく俺がやる事は。

携帯をチラッと見る。

これ（制御ファイル）を使って少女を止める事だ。

どうやら、このファイルは音楽ファイルらしい。恐らくコレを聞かせれば良いのだろうが、どうして音楽なんかで――

そう考えた時、俺は今日の物理の辻の授業が頭を過ぎった。

『脳の電気信号――音、リズム、テンポなどの事を調整すれば、頭の中にダイレクトで様々な情報が送れるように、聞いた人に命令なんかも出来るようになるかもしれない――』そう言う事なのか？ 30メートル程離れた所から、また少女がガラスの槍を俺に放つ。俺は集中し、その軌道を見極め、後ろへバックステップをして避け、少女との距離をさらに10メートル程広げる

さて、どうしたモノか？ 一応、送られてきたファイルを流してみると、複雑な電子音で奏でる曲が流れるが、少女に変化は無い。音が小さすぎるからか？ 俺の携帯に内蔵されているスピーカーは、そこまで大きな音が出る訳じゃない。この距離だと少女に聞こえる筈も無く、例え近づけたとしても、全部が耳に入るか疑問も湧く。近づいて耳にじかに押し当てれば話は別だろうが。

少女の足が止まった、そして、頭上に展開していたガラスの槍が碎け散り、少女の周りに浮遊する。

「なんだ？ 戦うつもりが無くなったのか？」

その考えは甘かった。甘すぎた。

第33話 剣

少女の下げた右手の掌に浮遊しているガラスの破片が集中していき、1メートル程の西洋の剣の形になる。その形になったガラスの剣を握ると、40メートル程離れた所に居る少女は、忽然と消えた。俺も少女も駄々広い校庭に居る、移動したのなら気付かない筈が無い、それが消えたんだ。

そして消えた事を認識した次の瞬間、背後で校庭の特有と砂のジヤリツという音が聞こえた。人が踏みだす時に鳴るような音だ。

「え!？」

振り向いた時、そこに居たのは、剣を振りかざそうとしている少女の姿が。

躊躇いは無い。あるのは殺気だ。

俺は、右脚に力を一気に込めその場から校舎の方へ緊急回避をした。

「ぐああッ!!」

背中に熱い感触と激痛が走る。生まれて初めての感触。

30メートル程離れ、少女を見据えながら、恐る恐る手を背中に当てると、手にべっとりと赤いモノが付着している。

きつ、斬られた。でもどうやって移動を——!？

また、さっきまで居た場所から少女の姿が消える。

今度は俺のすぐ目の前に現れて、ガラスの剣を俺の頭を目がけ振り下ろす。俺は、左に10メートル程右に跳び剣をかわした。

剣を下げながらこちらを顔を向けている少女を見ながら、一つの憶測に行きついた。

「まさか、この子」

いや、まさかじゃ無い、現実をうけ止める。今ここで起こっている事に常識を探すほうが難しいだろ。

「瞬間移動をしている!？」

まったく、チートすぎるぞ、ちくしょうが。

レベル5で四天王に戦う位の理不尽さだ。持つてるスキルに差があり過ぎる。アレじゃ近づくなんて不可能だ。一体どうすれば。

また少女が消えた。出現するのを確認する事も無く、俺はその場から移動する。元居た位置を確認すると、少女がその場に居る。そして、また消える。今度は俺は、すぐに移動する。その行動が幾度となく続く。

「はあ、はあ、はあはあ——」

体力が削られる。少女顔色一つ帰る事無く、無表情顔に似合わない涙を流している。このままじゃ、駄目だ、何時にファイルをダウンロードしたのか、よく覚えて無いけど、使用制限10分だと、もう残っている時間はそう長く無いだろう。

校舎近くに追い込まれた俺は、また消えた少女の攻撃を避ける為に、校舎の割れた窓から校舎の2階へと逃げ込んだ。

そして、近くの3年3組の教室に逃げ込み、ドアを閉め、息を殺す。

今まで、連続で続いていた、少女の攻撃が止んだ。何故だ？ そう思った時に少女の足音と思われる音が廊下から響いている。

俺を探している？ さっきみたいな消える移動で俺の前に現れない？ 何で？ さっきまでと今の状況で違う事は……俺の姿が見えていない事か？ 確かに今まで消える時に少女の無機質な視線を感じていた。だとしたら、あの移動法は目標が見えて無いと使えないのか、そうならば少しは、時間を稼げる——いや駄目だ、時間を稼いでいたら身体機能強化の能力が切れてしまう、そうなたら一撃でお陀仏だぞ。なんとかして、この音楽ファイルをあの子に聞かせないと。

俺は、最後の希望の携帯を握りしめる。

あと何分位、能力を使えるだろうか？

俺は、教室にかけてあった時計を見た時、時計よりもあるモノに目が行った。

「校内放送用のスピーカー？」
時計の横に設置されている四角い50センチ四方程のスピーカー。
これなら――

第34話 起死回生

俺は、教室の窓から跳び、少女に気づかれないうちに、校舎の4階へと向かう。着いたのは俺の教室の1年3組だった。そつと教室から出で、廊下の一番奥の部屋へと走る。その部屋は放送室だ。

部屋に入ると色な機材が並んでいる、そして電源を入れ俺は、学校の敷地内の全てのスピーカーから音が出るようにセットする。

「まさか、こんな所で、あの4月7日の部活巡りが役に立つとはな」
あの27回繰り返し返した、4月7日。俺は、メールに届いた、『部活に入れ』だけの文章を頼りに、この学校の部活を全て回り尽くした。その時に勿論、放送部にも足を運んだ訳だが、放送部の部長は放送部らしいと言えづらい人で、やかましい人だった。頼んでも無いのに、機材の説明をしたり、やってみるかと言って、一通りの機材を俺にいじらし、大体の使い方は覚えていた。

「あの部長、今度会ったら礼でもしとくか」

そして、放送室にある固定マイクに携帯を向けて、準備が出来、再生ボタンを押そうとした時、廊下から足音が聞こえて来た。

「くそ、気付かれたか」

機材を壊させる訳にはいかない。

俺は、再生ボタンを押し、廊下へ飛び出した。

「ここだ！」

20メートル程先に暗闇の廊下に輝くガラスの剣と翼を持った少女が居た。翼は廊下が狭いからか邪魔なのか、背中に折りたたんでいる。

俺が少女の姿を確認した瞬間、少女が消え、俺の目の前に現れる。くそ、場所が狭くて、上手く避けられない。

少女は、ガラスの剣を俺の左腹部に凄い勢いで突き刺した。

「ごふッ」

俺は、その衝撃で窓の方へと吹き飛ばされ、校庭の中心辺りに激

突しクレーターを作った。

「があ」

口から血が飛び散る、どうやら内蔵もやられたらしい。そして目の前に少女が現れ、無表情な顔に涙を浮かべながら、仰向けに倒れる俺にガラスの剣を向ける。

涙の流れる無表情の顔は、やけに悲しく見えた。

ああ、死ぬのか？ もう声も出ない、身体に力も入らない。もう諦めかけたその時、グラウンドに設置されたスピーカーから、校庭に設置されたスピーカーから、あの複雑な電子音で奏でる曲が流れたすと、少女が頭を抱えて苦しみ出した。ガラスの剣と翼は、徐々にただのガラス欠片へと崩れて行く。俺には何も感じない曲だがこの少女は、確かに何かが起こっている。

そして、ガラスの羽が全て砕け、頭上にあつた天使の輪のような物が無くなると、少女はその場に倒れ込んだ。

倒れたばかりの少女は、『はあ、はあはあ！』と、荒い息をしていたが、少し経つと呼吸も落ち着いて来た。

第35話 謎男

倒れたばかりの少女は、『はあ、はあはあ！』と、荒い息をしていたが、少し経つと呼吸も落ち着いて来た。

よかった、大丈夫そうだな、と思った瞬間に、頭に強烈な頭痛が走る、また、あのファイルの副作用だろう。

俺の意識がじよじよに薄れて行く中、校舎の方から誰かの足音が俺達の方へと近づいて来る。痛みで倒れている俺の目の届かない方向で、男の声がし始めた。距離は見えないので良く分らないが、10メートル位はありそうだ。

呼吸が落ち着いた少女は、どうやら男の声の主の方向に膝をついて向いている。

「うん、どうやら上手くいったみたいだね、大丈夫かい？」
雨音あまね
六花ちゃんりくか

男の声が女の子の名前を呼ぶ。どうやらこの少女の名前みたいだ。
「は、はい、どうして、わたしの名前を？」

驚いた口調でいう少女は、

「それよりも、この男の子を助けて下さい、わたしがわたしが――」
鼻が詰まったような女の子の音がする。

「意識は、ちゃんとあるみたいだね。僕はその子を助けたいし、助けられないいけないけど。君なら出来る筈だよ」

「えっ？」

「僕はこれから、コレの後始末をしないとイケないからね、そうだなあゝ盗んだバイクで走りだした少年達が窓ガラスを割って回ったとでもしとこうか」

さらに話しを続ける男。

「君は、気にしなくて良い。だから君はその男の子の傷を治して早

く学校から立ち去りな。今の君ならその『力』をコントロール出来るからそれ位は、出来るはずだよ。それじゃ」

そう言つと、男はその場から離れて行くのか、足音が遠ざかつて行く。

「待って下さい。アナタはなんなんですか？ 何か知っているんですか、この『力』の事も」

足音が止まる。

「僕は何者なのかは教えられないし、その力の事も知っているけど教えられない。ただ、いずれ君も、その男の子も知る時が来るさ――」

そこで俺の意識は、途切れた。

第36話 アパート

「うーん」と寝ぼけた調子で言葉を漏らし、俺はベッドで寝がえりをうつ。少しだけ瞼を開けると、明るい光が目に入る。

んう？ ベッド？ はて、俺は何いつ寝たのだろうか。確か今日は部室を掃除して、利一とハンバーガーを食って、それから学校で――

体をゆつくりと起こすと、隣から、

「よっ、良かったです。本当にごめんなさい」

聞き慣れない女の子の声が耳に入ったと思ったら、何やら柔らかいモノが俺の鼻や頬、顔の表面に押し当たる。俺が目を開けて見えたモノは何もない真っ暗だったが。その柔らかい感触が離れた時、それが何だったのかが解った。

「ぷうはあ！」

夜の校舎で出会った少女俺に抱きついていたのだ。

「だっ、大丈夫ですか？ 顔が赤くなってますけど」

柔らかかった。良くある表現だがまるでマシユマロのようだったと思いたいとこだが、起きてまだ、意識がぼやけていたせいか、柔らかかった以外の事が思い出せない。無理して、思い出そうとすれば、俺の未発達な脳の容量を超えたのか、ただ単に俺が純情なのか、思い出そうとすると顔が熱くなってしまう。

情けない。悔しい。

「ホントに顔が赤いですよ」

心配そうに、夜の学校の出来事に負い目を感じているのか、瞳に涙を瞳に溜めながら、手ひらを俺のデコに当てる。

さらに顔が火照る。

「だっ、大丈夫ですから」

そう言いながら、手をどかした。

まさか、自分がここまで純情だったとは、ただ女の子にデコを触

って貰っただけだぞ！ 確かに、今まで彼女も居た事無いし、女子との絡みも殆ど無かったが。あつ、鬼塚はアレは、一応絡んだけど、ときめく要素がまるで無かったのでノーカウントだし、経験が無いとはいえ情けないにも程がある。

落ち着かせる為に、一つ深呼吸をし、今日夜の学校で起こった事を思い出して、ガラスの剣で貫かれ腹部を触ってみるがなんともない、それどころか斬られた背中への傷も、左肩の穴も、体中のあちこちに在った傷は無くなり痛みも感じない。

「あつ、怪我は私が治しました」

傷は完全に癒えていた。

「一体どうやって？ それより此処はどこだ？ あの後どうなったんだ？」

俺が困惑気味に少女に尋ねると、

「此処は私が住んでいるアパートで、今は午前零時を回った位です、それよりも本当にごめんなさい、わ、わたし」

少女は改めて大きく頭を下げた。誠意の籠った謝罪だと解る。

確かに俺を襲った正体は、目の前のウチの高校の制服を着て髪は肩くらいで、おとなしいそうな印象を受ける女子で間違い無いが、様子を見る限り、やはり自分の意思で襲った訳では無いみたいだ。だとしたならば、ここで彼女を責めるのは場違いになるだろう。それよりも俺が知りたいのは『あの力』についてだ。

「大丈夫。ちゃんと生きてるし、それよりも何がなんだか解らないんだ、知っている事を説明してくれないか」

「怒ってないんですか？ もしかしたらアナタは死んでしまったたかもしれないんですよ」

「確かに、痛かったし、怖かったけど、それは君の意思でした事じゃないんだろ？ だったらここで君を怒っても、なんの意味も無いよ」

少女は顔に付いている涙を拭いながら、『すすいません、ありがとうございます』と言った。

やっぱり女の子の顔は、涙がない方が良い。

第37話 自己紹介

「そつ、それじゃあ、私の知っている事を話します」

そう言う少女は、小さな丸い椅子をベッドの横に置き、それに腰掛け話し始めた。

「先に言つときますと、もう大丈夫みたいなので安心して下さい。あの学校での出来事の後『この力』をコントロール出来るようになったみたいです」

この力というモノは、あの力だろう。夜の学校のあの人間業とは思えない力。

俺は話し中だったが、さつきから気になっている部屋の様子に目が行く。部屋の様子を見る視線に気づいたのか、

「あの……すいません散らかっていて」

少女は申し訳なさそうに言った。

散らかっているの言うのは、他人を部屋に招き入れた時の挨拶のような意味では無く、その言葉の通り散らかっていた。だが、散らかり方が普通では無い。他にドアが無いことから十畳程ワンルームアパートだろう部屋の様子は、タンスは倒れ、テレビの画面は割れて床に転がっていて、ベランダに出る為の大きなガラスも割れている。簡単に言うのと、とても気分の悪い強盗が部屋を滅茶苦茶にして行ったと言えば解りやすい。

「実はコレ……わたしがやっただんです。4月6日の深夜2時位の事です。私は自分の体の妙な異和感と部屋の物音気づいて目を覚ましたんです、部屋を見渡すと、テレビや部屋にあった物が浮かんだりして——数分で部屋が滅茶苦茶になりました。最初その光景を見た時は、幽霊か何かの仕業かと思ったんですが、それは違って私がやった事に気付きました」

「気付いた？」

「はい、物を浮かべたりしているのが自分だと解った——いい感じでした。自分がやった事だと……自分のせいだと。だから、本当はその日から始まる筈だった学校行きたかったんですけど……もし学校でこんな事が起こったら、大変な事になるから4月6日は学校を休みました」

4月6日。

俺がループを経験した初めての日。その日に妙な力を得た少女。これは偶然なのか？

「4月6日は、この部屋でじっとしていたんですけど、夜になるにつれて、今まで落ちていたあの力が、ざわつく感じがして、人気の無い公園でも行こうと思ったんですけど途中で力がまた……今度は道に止まっていた車を壊してしまつて——こんな事、誰にも相談できなくて……」

相談が出来ない。その気持ちは解る。

常識に囚われている人達が今の話を聞いたとして、信じて貰えるだろうか。彼女は誰にも迷惑をかけたくないから人気の無い所へ向かったんだ、直接その現象を見せて誰かに納得させて貰うという選択肢は彼女にある筈が無い。

常識というゲシュタルトが崩壊している俺だつて、夜の学校の出来事が無ければ信じられたかどうか解らない。

「お父さんの転勤が多くて、小学校から中学までに13回も転校して、全然友達も出来なくて、だから、お父さんとお母さんに頼んで高校生になったら一人暮らしをさせて貰ったんです。ここは両親の生まれ育った町だったのでこの町に決めて、高校生になってから、今までの自分を変えて、頑張ろうと思つたら——」

自分が変わってしまった、悪い意味で。

理由も解らず、解決法も見つからず、期待していた高校生活がぶつ壊れた。

だから立っていた、朝、校門から遠くで。

だから見上げていた、校舎を。

自分の力が他人に害を及ぼす可能性が在るから、入る事が出来なかった。

辛かったのだろう、小中と友達が居ない、だから一人暮らしまでして高校に通おうとした。それが出来なくなっただ。

みんなが普通に行っている事が出来ない。誰の所為かも解らない妙な力によって希望が断たれて絶望に変わった。

だから、放課後に校舎に入り、屋上から踏みだした。

何処にもぶつける事も出来ない気持ちを自分にぶつけ、それが背中を押してしまった。

恐らく、たったそれだけの理由でと言う者も居るかも知れない。

馬鹿じゃないかと、罵る者も居るだろう。だが彼女にとってそれは、命を懸けるのに十分過ぎる理由だったんだ。

だが、でも、例え、どんな理由や原因があろうとも、『自殺は駄目だ』と言う事は簡単だ。間違っではない正論を彼女にぶつける事は、簡単で単純なのだから、だが簡単で単純だからこそ重みの無い言葉になってしまう。

だから、俺が言つて良い言葉は——責める訳でも、生きると論ずる事でも無い。もっと単純に自分の正直な言葉を言う事にした。

「まだ死にたい？ 死んだら俺、悲しいんだけど、『友達』が消えちゃうから」

ぎこちない言葉だ。言いたい事がよく伝わらなかったかも知れない、でも彼女は、顔を両手で覆って泣きだした、そして、良く聞き取れないような声で、

「わたし死にたくありません」

「何か、困った事があつたら、俺に相談してくれいいよ、余り頼りになるとは言えないけど、全力は尽くすから」

「は、はい」

そう言えば自己紹介をしていなかった、

「俺、愛田千秋。君は？」

「あまね雨音 りくか六花です」

俺は右手を雨音の前にだし、

「じゃあ、宜しく」

雨音は『こちらこそ』と言って笑顔で強く握った。

第38話 水色（前書き）

感想アドバイス、お待ちしております。

第38話 水色

俺はベッド横から両足を床に着く形で座り、学校での出来事の真相へと迫る為に目の前に居る雨音に聞きたい事を聞き始める。

「じゃあ、雨音は何でその力が手に入ったのかも解らない訳だ」

「はい、でも今は、コントロール出来るようになったみたいです、愛田君をここまで運べたのもこの力のおかげだし」

そう言つと、雨音は右手を床に無造作に転がっていたテレビのリモコンに向けるとそのリモコンが宙に浮かびだした。

「おおー」

そして、俺の前まで持つてくると、差し出した俺の手のひらとそつと置いた。

それを見て俺は、見たまま通りの感想を答える。

「これってあれだよな、超能力の念動力とか、そう言ったものだよな、きつと」

ユリ・○ラーでさえ、スプーン曲げが限度だったから、もしかして雨音は凄いエスパーじゃないのか？

「そう言えば、学校での事は、ちゃんと覚えているのか？ 余り意識が在ったとは思えない顔をしてたけど」

雨音は、顔を赤くして、

「わつ、わたしどんな顔してたんですか？ も、もしかして、とても変な顔してたんじゃない」

「いや、変な顔はしてないど、表情が無かったんだ」

そう、雨音は学校で屋上から飛び降りて叫んだ後、感情が無くなったかのように無表情になっていた。まるでロボットのように。魚や爬虫類のように表情がなかった。

「その感じだと、やっぱり覚えて無いんだ？」

「あの、わたしが屋上から飛んだ後、愛田君に助けて貰ったところまでは、ちゃんと覚えているんですけど、その後の事は、凄く曖昧でも意識は在って、夢心地のような感じで、自分の意思では動けなかったんです。えっと、ゲームのデモストレーションを見ている感覚で」

「意識は、少しはあったけど、自分の意思で動けなかったと言う事か」

雨音、「はい、そうです」と頷いた。

さつき見たモノが超能力として、あのガラスの槍や剣は念動力と言った類のものかな？確か英語で『サイコキネシス』だったかな、じゃあ、あの瞬間移動は、テレポートって事か。

「雨音は、自分がテレポートをした事を覚えてる？」

数秒、考え込み、

「はい、なんとなく、そんな事をしたような気がします」

「今、してみたり出来るか？」

「多分出来ると思います。やってみますか？」

と言つて、丸い椅子から立ち上がると、その場から消えた。

消えた次の瞬間にはベッドに座っている俺の右隣で、『ぼおん！』

と何かがベッドに着地するような音がすると、そこには、正座の状態から脚を広げて崩し、少し前のめりになってその衝撃によって捲れた制服のスカートを押さえる、顔の赤い雨音の姿が在った。

水色！？ 確かに今、スカートが捲れて水色のモノが目飛び込んできた。

「みつ、見ました！？」

「なつ、何も見て無いですよ」

動揺した。

ホントは見ました。

「嘘です、愛田君、顔が赤いですよ!」

「ちっ、違う、俺はその……体温が高めな訳で、これが普通なんだ!」

雨音は、顔を赤くして照れながら、でも少し残念そうに、
「そうですよね、わたしの見たって、何も感じませんよね」

「そんな、事はない、とっても可愛い、水い——」

図られたと一瞬思った。でも違かった。

聞いた雨音も顔を赤くして、停止している。俺はフリーズしている。

雨音の超能力で記憶を消しせるのであれば消して貰いたい。出来れば二人とも。

膠着状態が続いて数秒。俺は思った、雨音は、天然なのではと——

第39話 情報の共有

「じ、じゃあ、話しを続けようか？」

何も言わずとも、数秒前の出来事は水に流そう。そう言う事になった、言葉を交わした訳じゃないが、相手の顔の表情とアイコンタクトによってその流れに自然に流れた。もしかしたら、俺と雨音は似た所があるかもしれない。

この気まずい空気を壊してくれたのは雨音だった。

「あの、どうしてレポートしてくれと言ったんですか？」

俺は、ただ単に興味本位、好奇心で聞いた訳じゃ無く、ちゃんと考えがあつてやってくれと言った。

「ああ、もしその能力がまた、暴走？ ちから とも言ったらいいのか、またあの時みたいな事にならないか確認の為にだよ」

そこで俺はポケットから携帯を出そうとした時、携帯を放送室に忘れて来た事に気付いたが、学ランやズボンのポケットを漁っている時、雨音が「これですか？」俺の携帯を阻止出した。

「あ、ありがとう。あれ？ おかしいな、放送室に忘れて来たと思っただけだ」

雨音は意外そうな顔をして、

「そうなんですか？ この携帯は校門の前で光っていたんで、きっと愛田君が落として行った物だと思って持って来たんですけど」

少し不思議に思ったが俺は、話しを進める。

「ありがとう、でも、もしかた力が暴走するような事があれば、これを聞かせれば大丈夫だと思って」

俺は携帯を開き、あの時送られてきたメール。『制御ミュージック・コントロールプログラムファイル』と書かれた添付メールを見せる。さっき確認したらば、このメールのファイルも『身体機能強化』のファイルもメニューバーに登録されていたが、あえて俺はメールの方を見せた。

「これは？」

キョトンとした顔で携帯を見る雨音。確かにこれだけ見ても、何かなんだが解らないよな。

俺は、今日どうやって、暴走した雨音を止めたのかを自分なりの考えで雨音に説明した。『制御ミュージック・コントロールプログラムファイル』を使った事。他にも、4月6日、7日のループについて、謎のメールの事もだ。俺の知っている事は多いが、それよりも解らない事と謎が多すぎた。

話を聞いた雨音は、それ相応のリアクションをしたが、少し納得したような顔もした。

「じゃあ、愛田君は、このメールの通りに学校へ行ったら、わたしが屋上に居たって事ですか？」

「ああ、あのファイルの内容や、メールの内容、タイミングからしても俺が学校に戻れと言われた理由は、雨音を助ける為だったとか考えられないんだ」

「でも、わたしは、この力の事は勿論誰にも教えて無いですし、校舎に入ったのも、生徒の皆が下校した後なので、何が起こるか予測出来る人は、居ないと思うんですが……でも一人気になる人が」

雨音の気になる人。それは俺の気になる人と、同じ人だろう。

「校庭で俺が倒れた後に、近づいて来た人だよな、確か男の声をしていたけど、顔は見れなかったんだけど、雨音は見た？」

「わたしも、暗くて顔が良く見れなかったんですけど、私がこの力をもうコントロール出来るって知っていたし、怪我もこの力で治せると言って、何より、『この力』について知っていると聞いていたですし」

俺は携帯を握りながら、

「だったら、きっと俺の携帯を校門に置いたのもソイツの可能性が

在るし、『この宛先不明のメール』を俺に送っている張本人の可能性が在るな」

口調を柔らかくして、

「まあ、何処のどいつか知らないけど、悪い奴じゃ無いみたいだし、感謝しとかないとな」

この宛先不明のルールが無ければ、ループの世界を迷走していたろうし。

不良達にも勝てなかった。

雨音を見つける事も出来なかったし。

屋上から落ちた雨音を助ける事も出来なかった。

そして、暴走状態の雨音を正気に戻す事も出来なかった筈だ。

「そうですね、感謝しないといけませんね……でもわたしが一番感謝しているのは、あつ、愛田君ですから、あの、その、ありがとうございました。いつか絶対お礼をします」

顔を赤くして真剣に言ってくれる雨音だったが、そんなに張り切られても困るので、じゃあ今度宿題でも移させてくれと言ったら、

「すつ、すいません、わたしそんな頭良く無いです……」

うーん、この子は、冗談で言った事も本気にしてしまうタイプみたいだ。

雨音が俺の顔を数秒見てから、

「あの、一つ聞いても良いですか？」

「ん、何だ？」

「もしかして、わたしと何処かで逢った事無いですか？」

「えっ、確か4月7日、8日と校門から少し離れた所に立っていた時じゃないか？」

雨音は、軽く首を左右に振って、

「いいえ、その前に、あの時すでに、逢った気がすると言うか、愛田君に、あの、その『惹かれた』気がするんです」

「えっ？」

それは、一体どう意味で受け取ればいいのだろうか。

「あつ、あの変な意味じゃなくて、子犬や子猫を見ているような感覚があつて」

さっきこの子、変な意味じゃ無いって、言つたよな、十分変な意味だと思つのだが。

「逢つた事は無いと思うぞ、もし逢つた事があるとしても、入試の時か、その辺の道ですれ違つたりした位じゃないか？」

「そうかな……そうだよな、ごめんなさい変な事を聞いて」

第40話 恥ずかしい

「さてと、これからどうしようかな」

時刻は、もう0時30分を回っている。先程メールを確認した時に1件の新着メールが届いていた、宛先不明では無く、母さんからだ。内容は、

『帰りが遅いけど、また利一君の所にも行って、寝ているんですよ？ 余り迷惑をかけないように』

との事である。受信時刻は23時02分。

まあ、今までも、利一の家には無断（言うのを忘れて）で泊った事も何回もあるし、そう思っているならそれでいいか。

「今から帰っても良いけど、どうしたものかな」

俺は腰かけていたベッドから立ち上がり学ランを脱いで確かめると、やっぱり大量の血が学ランに付着していた。

「このまま、帰って警官にでも見つかったら、殺人を実行した後にも勘違いされそうだしな、それに」

俺の髪を風が靡かせる。この部屋はやけに風通しが良い、何故ならベランダに出る時に使う大きなガラスが割れているから、まだ四月上旬だから寒いくらいに風が部屋や体の周りを通る。

「……大丈夫か？ この部屋？ セキュリティは勿論、寒く無いか？」

少し慌てた様子雨音は、

「大丈夫、カーテンをちゃんと閉めれば、風は余り入って来ないし」

そう言っ、大きな割れたガラスへ大きなカーテン占める雨音。

「セキュリティだって今、わたし超能力者ですし、明日は土曜日だし業者の人を呼んで窓を直して貰うから。だから心配しないで！」

そう言っ、クローゼットから数着の衣服を取り出し俺に渡す。

「制服に血が付いて駄目なのなら、この服をかしますから！」

「あのー雨音さん？ スカートなど混じっているのですが、コレを俺にどうしろと？」

「だっ、大丈夫、愛田君、背も余り高くないし、細そうだし、大丈夫！」

「そう言う問題じゃない。それに背は平均より若干？ 低いだけだし！ どうしたんだ？ さっきから様子が変だけど、まさか！ 力の暴走の前ぶれとかじゃ！！」

そんな事を言ったら雨音が「違うの」と言っつて、俺の両肩を掴んで、顔は下を向けて、

「愛田君って優しいから、わたしの事、心配してくれてるんでしょうけど」

まあ、確かにセキュリティとか、寒くないとか、そんなつもりで言っただが、

「ああ、そうだけど、良かったら部屋の片づけも手伝おうか？ 一人じゃ大変だろ？ 今夜泊まって行って、手伝おうか？」

下を向いている為、雨音の表情は解らないが、耳まで赤い。

「あのね、愛田君。心配してくれるのは嬉しいんだよ、とっても。でもわたしも女の子だから部屋の片づけなんて、一人でしたいし、と、とっ泊るって、ベッドなんか、見ての通り、ひっ、一つしか無いんだよ！！」

「……」

状況整理、把握。そして後悔。

そう言う意味か……。

あつ、つまりアレだ、俺は、デリカシーと言うモノが足りないと言う事か、確かに今日初めて話をした年頃の男女が同じ屋根の下で一夜を過ごすと言う事は、良くない事だよな。……なんつう言葉を口にだしているんだ。

右手で顔を隠しながら、そんな事を考えた。

「じゃあ、俺は帰ります。何か、ホントすいませんでした」

ぺこりと頭を下げ、玄関向かおうとするが、

「待って、服は？ 来る時は、たまたま誰にも見付からなかったけど、帰りはそれじゃまずいんじゃないかな？」

「……」

確かに、誰かに見つかったら、どう説明をすればいいのか。

夜の学校で超能力者と戦って傷を負った時の血なんて言える訳が無い。

「これならどうか？」

雨音は恥ずかしそうに、紺色のデニムのスポンと、全体が白く胸のところに黒の英語のロゴが入っているＴシャツと、黒いパーカーを俺に差し出した。

当たり前だが全部レディースだ。だが無難な服でもある。ぱっと見は、女性用とは解らないだろう。だが、今、俺の考えている問題はそこでは無い。

女子着ていた服を着る事に抵抗がある。嫌という訳では無く。恥ずかしいと言う意味で。

雨音は目を逸らしながら、俺に服を差し出したままだ。

雨音も恥ずかしいのだろう、だが、俺も恥ずかしいんだ！ 着ないで帰るにはリスクが高すぎるな、先ほど部屋の窓に映った、パチンコ屋の巨大バルーンのおかげで、このアパートの位置は、ほぼ把握した。自転車は、学校に置いてきてしまったから、歩いて20分位はかかるだろうし、深夜とはいえ帰る途中で大通りを通る事にもなるし、誰にも会わないで帰れる可能性は低いだろう。

選択肢は無いか……

俺は服を受け取り、

「じゃあ、ちよつと借りるよ、サイズが合わないかもしれないけど」
受け取ったあと、雨音は少し離れて、俺に背を向け壁の前に立つ

た。見ないから着替えてという意味だろう。

（数分後）

デニムとズボン、Ｔシャツ、パーカーが全て着れてしまった俺が居た。

「あつ、良かったです、少し丈は短いですけど。やっぱり細いですね、羨ましいです」

俺の心を癒すためか、お世辞のように雨音は言いが全く嬉しくは無い。

もつとご飯食べよう。そんな目標を密かに立てた。

その後俺は、雨音と携帯の番号とアドレスを交換し、「じゃあ、月曜日学校で」と言って、アパートを後にした。

自宅に着いて、門を開けると、そこに学校に置いてきてしまった筈の我が愛車『壱キユツパ』が駐車されていた。

きっと、あの男だろう。

「どうやら、住所も知られているみたいだな」

でも安心した、あれだけの事があった学校に置いてきてしまつて、後々面倒な事になってしまわないかと思っていたからだ。

その後は、家に入り、今日はさつとシャワーだけを浴びて就寝した。

第41話 おにいちゃん（前書き）

感想、アドバイスなど何かございましたら、お願いします。

第41話 おにいちゃん

今日は日曜日。

休日。

俺は日曜日と言う休日の余韻を存分に堪能している。

ここ数日、俺の感覚だと1カ月以上の期間の間、奇妙奇天烈、摩訶不思議な出来事があったんだ、少しくらいのんびりしても、罰は当たらないだろう。

だから布団に入って、二度寝、三度寝と繰り返しているわけだ。
睡眠サイコー。心のオアシス。

今日は、父さんは接待ゴルフで朝から居ないし、母さんも昨日から友人と旅行へ行くと言って家を開けているので、家に居るのは、俺と妹の千夏^{ちなつ}だけだ。よって、俺は存分に休日を満喫している訳だ
が。

部屋のドアが開く音がした。

誰だ？ ああ家には千夏しか居ない筈だから千夏か。

「おにいちゃん、起きて〜」

そう言いながら、ベッドで布団に潜りこんでいる俺の体の腰辺りを揺する。

ん？ おかしいな、千夏ってこんな声をしてたっけ？

「ねえ〜はやく〜」

やつぱりいつもの声と違う、てか、この声に聞き覚えがあるような気が……

「いい加減、早く起きなさい、愛田君」

「!？」

声色は一緒だった。

口調が冷たくなった。

俺の心は氷ついた。そしてその冷え切ったハートの氷が、かき氷

[illegible]

検索結果
↳ 該当者1名

ここ、どこ？ 此処何処？ 学校？ 保健室？——自宅の自分の

ゆつくりと捲られる布団。

「おはよう、愛田君。あら、どうしたの？ 凄い汗で顔色も悪いけど、何か怖い夢でも見たのかしら？」

目の前にはオカルト研究部。略してオカ研の部長の姿が、

「何、その顔は、せっかく私がモーニングコールをしてあげたのに、不満な訳かしら？」

「勝手に家に部屋に入られるのは、とても困るのだが」

俺は呆れながらベッドから体を起こし、

133

この強烈な性格の鬼塚をよく家に招き入れたことを俺は疑問に思った。

鬼塚は、声色。表情。仕草。キャラを変えて、
「お早うございます。え、えつと愛田君居ますか？ えつ、寝てる！？ 困ったな、ちゃんと連絡入れたのに——あの、もし良かったら、愛田君の部屋に案内させて貰ってよろしいですか？」

につこりと笑って言う鬼塚。それは笑顔だが、どこか怖い。

「とつ、言ったら、ご丁寧に案内してくれたわ、中学2年生なんですって妹さん、愛田君に似ずに良く出来た子ね」

「お前、キャラが変わり過ぎだろう！ 多重人格者かお前は！！」
女優なれる位の演技だ。いや、今年度アカデミー女優賞を取れるのではないか。少なくとも俺が審査員なら100点中120点はくだらない演技だ。

「私は私よ、決まって居ってるじゃない。男の人はこんなのが好きなんでしょ」

甘い声色に変えた、女優が、

「おにいちゃん」

「妹にそんな幻想を抱いているのは、実際に妹が居ない奴だけだ」

「あら、そうなの残念ね、私はそんな幻想を抱いているだろう、愛田君の幻想をぶち壊そうと思っていたのに」

鬼塚は、「期待はずれね」とため息を漏らす。

「……一応聞いとくが、俺がそんな幻想を持っていたら、どう対処しようと思ってたんだ？」

鬼塚は黒い本を右手に持ち、俺にチラつけながら、

「この右手に持った本で、側頭部を強打しようと思っただけよ」
どうやら、この凶器（本）は、デフォルトで鬼塚に装備されているらしい。

第42話 机の引き出し

どうやら、この凶器（本）は、デフォルトで鬼塚に装備されているらしい。

俺は、ベッドの横に床に両脚を着く形で座り、俺の目の前に立っている鬼塚を見上げながら、

「それよりも、何で俺の家の場所を知っているんだ」

「それは、私のバイトのテリトリーだからよ」

テリトリーって、怖い響きだな、一体どんな危ない橋を渡っているんだ。

「バイト？」

「ええ、私のバイトは、新聞配達だからよ」

……似あわない。恐らく、鬼塚のバイトがなんだか当ててみようゲームなどを開いたとして、100回答えても、当たるがしない。それ程までに似あって無いと思った。

「私も別に好きでやっている訳じゃないのよ、ただ、時間の有効利用を考えたらこうなった話しな訳で」

そうか鬼塚は親が居ないから、何かしらの補助金や親戚などの援助を貰っているにしても、足りないからか。そして勉強や調べ物といった時間を確保する為に選んだのが新聞配達か、考えてみれば理に叶っているな。

「新聞配達って、自転車でか？」

鬼塚呆れた顔をして、

「今時、そんな人が居る訳がないじゃない」

ため息をつきながら、アナタは何時代の人なのと付けくわえた。

確かにそうだなと、自分の言った言葉に反省まではしないが、間違いが在った事を認め、一つの疑問を口にした。

「でも、原付にしたって、16歳からだろ、じゃあ、まだ――」

「私の誕生日は、4月2日よ」

最速の早生まれだった。

「たがら、どう足掻いても、愛田君は私を年齢で越せる事が出来ないのよ」

別に競うつつもりも無いがな。

「で、今日は何の御要件でございましょうか」

鬼塚は俺の部屋の片隅にある、勉強机を見ながら、

「愛田君だったら机の引き出しがタイムトンネルの可能性がるからよ」

「俺はのび太程、落ちこぼれてはいねえよ!!」

その言葉を聞いた鬼塚は軽く嘲笑しながら、

「あら、愛田君は、のび太君を馬鹿に出来る程の人物なのかしら？」

「どういう意味だ」

「だって、のび太君はいつも友達に囲まれて、心の友と言われる男
友達や将来結婚するガールフレンド、おまけに、青い狸のロボット
と一緒に居るのよ、思いつきりリア住じゃない、これでもアナタは
のび太君を馬鹿に出来るのかしら？」

ぐ！ 正論を諭された。考えてみれば確かにリア住だ。

俺は半ば諦めモードで、「お前ドラえもんに詳しいな」と言っ
たら、「興味深い対象ではあるわね」と答えた。

鬼塚は過去に行く為の理論を考えているんだ、そう考えれば興味
深いと感じるのは当然の事か。

「もし、存在していれば、ネジ一本、ボルト一本になるまで分解し

て、調べてみたいわ」

「怖えよ、子供の夢をホントに分解こわしちゃったよ！」

「一体どこまで、分解しても話せるか見ものね」

もしそんな事が実際に起こったとしたら、18禁映像になると思
った。(スプラッター映画という意味で)

第43話 修学旅行の思いで

「話を戻しますが、今日は何の御要件で？」

この質問は本日2度目だ。そろそろ話を前に進めたい。

目の前に立っている鬼塚の格好は、ボトムスは膝上位のまでの白のスカートに、トップスは薄ピンクのブラウスに黒いジャケットを羽織っている、高校一年生としては、大人びた印象を受ける服装だが良く似あっている。

「これから何処かへ行くのか？」

「ええ、そうよ。これからショッピングに行くのよ」

そうですか、それでは氣付けて下さい。で済みそうもなさそうな空いだ。

「愛田君も付いて来るのよ」

何故？ という表情をすると。鬼塚は「今日は野外活動だから」と言っ、俺にすぐ着替えるようせかした。

鬼塚は「確か友達は、誕生日に何かプレゼントをするものよね？」と言う。どうやら先日過ぎたばかりの誕生日プレゼントと称して、今日ショッピングに付き合えと言う事らしい。まだまだ友達と話すのに慣れていないのか、元々の性格でこんな回りくどい言い方をするのか考えてみたが、きつとそんな性格なのだろうと言う結論にたどり着いた。

まあ、どうせやる事も無かったし、お互いの親睦を深めるという意味合いを込めて、ショッピングに付き合う事にした。

着替えをすまし、ショッピングに向かう為に、玄関で靴を入っていると、そこにはもじもじしながら現れた千夏の姿が、

「あつあの、鬼塚さん！」

鬼塚は、女優モードに入り、

「はい。なんですか、千夏ちゃん」

千夏の前だとそのモードなんだ。

「不束な者ですが、お、お兄ちゃんを宜しく願います」
と、意味不明な言葉を発し頭を下げる。

「いえ、こちらこそ、よろしく願います、それでは行つてきすね」

玄関から出た、俺は鬼塚に問う。

「なあ、千夏に何か変な事言わなかったか？」

鬼塚平然と、涼しげに、

「愛田君の部屋に案内される前に、（友達として）お付き合いさせて頂いてます。鬼塚です。と挨拶しただけよ」

「カツコのなかぁー！！　なんで抜けちゃいけないワードを平然と抜かしてるんだよ！」

鬼塚は口元をニヤつけながら、

「あら、何か問題があったかしら？」

「ありまくりだろ！　中二偉大な想像力無くても勘違いするぞ！」

「何を勘違いするのかしら？」

「それは、俺達がつき——」

言葉が喉元で詰まった。

「顔が赤いわよ愛田君。噂通りの純情なのね、どうやら、中三の修学旅行の夜に同室の人が持って来たエロ本を見ただけで鼻血を出したという話は本当そうね」

何故それを！？　俺の消したい過去ナンバーワン。

誰がそのトップシークレットを言ったのか99%解ったが一応聞いてみる。

「だっ、誰か、そんなデタラメを言ったんだ」

「ごめんなさい、私は部長として部員を売る事は出来ないわ」

……部員を売る事は出来ない。

オカルト研究部。部員。

鬼塚 千尋

愛田 千秋

佐伯 利一

誰が言ったのかは明白だった。実に解りやすい。

「俺の過去を利一から聞いて一体どうするつもりだ！」

「その反応からしてやっぱり本当なのね、今時珍しいわね。愛田君には童貞の言葉じゃ無くて、チエリーボーイの言葉の方が似合いそうね」

平然と、人様の玄関前で卑猥な言葉を連呼する鬼塚。

最近の女子高生はエロ本や童貞、チエリーボーイなどの言葉を普通の会話で使うモノなのか！？ だとしたら俺の女子のという幻想は、鬼塚によってぶち壊された。

「顔がさらに赤いわよ、愛田君。どうしたのかしら？」

この状況を面白がってるなコイツう。

ヒールを穿いて俺より背の高くなった、鬼塚に全てが負けているような気がした。

「友達の事を知ろうと思うのは当然でしょう愛田君。それがたまたま、心ぞう——弱みを握る事になっても仕方ない事よ」

コイツ今、心臓を握るって言いかけたよな、思いつきり悪意丸出しじゃねえか！！

完全に心が折れる前に、

「早くシヨッピングへ行こう、そうしよう！」

と、鬼塚にせかした。

「そうね、お喋りはこれ位にして向かいましょうか——楽しいわね愛田君」

にっこり笑いながらそう言った。

先に踏みだし前に出た鬼塚の背中を見て、

確かに楽しそうに見えた。
わらえる

笑顔ようになったな。……笑い方に多少問題があるが、逢った時に比べて随分表情も柔らかくなったものだと感じ少し嬉しかった。

鬼塚が振り返って、

「早く行くわよ、愛田君」

「はいはい」

とことん不器用な奴なんだな。

第44話 ショッピング

自宅を出た俺達は、バスを使って目的地へと向かった。

流石に休日という事もあって、人が多いな。

バスで15分程揺られて着いたのは、この町で一番デカイ総合品揃いスーパー。

2階建の広い建物に、日曜雑貨や食品は勿論、衣類、本屋、CDショップ、カフェ、ファーストフード店、その他食品関係の様々な店舗が集められ、さらに、道を挟んだ向かい側には映画館もあるのだから、ほっといても人が集まる場所だろう。

着いたところで、鬼塚に、

「一体何をお買い求めで？」

と聞くと、間髪入れずに「コッチよ」と言つて、スタスタと歩いて行く。俺は鬼塚の背中を追って行く。

何を買う為に来たんだ？ やっぱり服とかか？ それなら一人で来るよりも二人で来た方が楽しいと思ったからかな。

周りに居る同世代くらいの手を繋いでいるカップルを見て、自分も何時になったらあんな事が出来るようになるのやらと思ってしまう。

そして、鬼塚の足がとある店舗の前で止まる。

「ここ？」

「そうよ」

そこは、お洒落なファッションの店舗では無く、綺麗なカフェでも無い。大きな本屋だった。小説、漫画、雑誌、ライトノベル、カルチャー本、文学書。ありとあらゆる種類の本が集まっているのは無いかと思う位に本がズラリと並んでいた。

最近では電書籍の煽りをうけて紙の書籍の売り上げ余り芳しくないと聞いたが、そんな事は他の世界の話しですよと思う位に大勢の人

で賑わっていた。

だが鬼塚は、店内に入ると、本棚へ行く事も無く手ぶらでレジへと並ぶ。

「？」

何故かと思つたが、理由は鬼塚の順番になつてすぐに分かつた。

鬼塚はレジの大学生位の女性店員に向かつて、「先日、本を委託した、鬼塚なんですけど」と言つて、紙を店員へと見せる。

「あつはい、かしこまりました……」

その紙には頼んだ本が書かれているのだろうが、紙に目を通した女性店員は表情を曇らせ、

「あの、こちらに書かれている本、全て今日お持ち帰りですか？」

戸惑いなが確認をする。

「ええ、大丈夫です、友達が居るので」

右横に居た俺の顔を見ながら、鬼塚は言つた。

「それでは、少々お待ち下さい」

そう言うとき女性店員は、レジ裏のバックヤードへと消えて行き、1分程で歸つて来た、その両手には、4冊の分厚い書籍が重ねられていた。それを俺達の前に置いたが何故か、またバックヤードへと消え、戻ってきたその両手には分厚い書籍が4冊。

「……」

さらにもう一度バックヤードへと向かう店員。

やめてくれ、もう行かないでくれえ！

俺の心の叫びが届く訳も無く、戻ってきた店員の両手には、重ねられた3冊の分厚い書籍。

少し息を切らしながら店員は、

「以上11冊の商品でよろしかったですでしょうか？」

「はい」

代金の支払いが終わり、店を出た俺の手には、右手に頑丈そうな紙袋が二つ。左手には同様のモノが一つ。鬼塚の手には一つ。

ハッキリ言つて、重い。予想以上に重い。終業式の日に学校に置いてあつた荷物をまとめて持つて帰るような重みだ。

はあく。鬼塚との女子とのシヨッピングを楽しもうと思つた俺の考えが甘かつた。

鬼塚は残念そうな顔をしている俺を見て、

「あら、愛田君。なに残念そうな顔をしているのかしら？ まさか私とシヨッピングを楽しもうなんていう妄想をしていたのかしら」

妄想はしないが女子との買い物に少しばかり浮き足になっていたのは確かだ。

「言つたでしよう、今日は課外活動だつて」

確かに、先ほど購入していた本は、俺にはさっぱり解らない、ナントカ理論だつたり、ナンタラ粒子などが表紙に書いてある事からあの本は鬼塚が過去に行く為の理論を探す為に使う本なのだろう。

だから、『野外活動』。オカルト研究部の。そして俺は荷物持ちと言う事か。

本当に今日はこれだけの為に此処に来たらしく「帰りましょう」と言つて出口へと向かう。俺としては、せつかく来たのだから他にも何か見て周りたいのだが、両手にある知識と言う名の重りがある為、そんな事をしていては、何処にあるかも分からない鬼塚の家まで体力がもつか分らないので、その考えは空しくも却下することになった。

建物から出て、すぐ近くのこの総合品揃いスーパーの為にバス停へ向かい、バスに乗20分程揺られ、俺と鬼塚はバスを降りた。

第45話 お礼

座れないほど込んでいたバスだったが、このバス停で降りたのは、俺達二人だけだ。

そこから、鬼塚の自宅へと向かう。

「鬼塚、どれくらいでお前の自宅に着くんだ？」

「そうね、5分以上、10分未満と言ったところかしら」

今の俺にとっては中々現実的で残酷な数字だ。

もし30分とも言われれば、少し休憩しようとも言えるのだが、向こうにしてみれば、たった、5分以上、10分未満これで休憩しようと言うのは、一応男としてのプライドが邪魔して言う事が出来ない。

10分弱、俺の腕よ、もってくれ。

鬼塚は、自分のペースで歩き、それを追う形で歩いている。鬼塚の家が分からないから当たり前のことだ、もう少しペースを落としてくれると、とても有り難いのだが、残念ながらその気持ちが鬼塚に届く事は無い。

前を向いたまま、俺に涼しげな口調で話しかける。

「愛田君、意外に力持ちなのね、ホントは少し休憩しようと思っていただけそれなら大丈夫そうね」

おいしいッ！ 余計言いづらくなった、もう言える空気なんか宇宙空間並みに無いよ。鬼塚さん、貴方の後の男の両腕は陸に打ち上げられた魚みたいにピクピクしてますよ！

「ああ、これ位男だったら楽勝だろ」

一方心の中では——早く、早く、早く、早く、早く早く早く早く早く着いてくれえええ！！

数分後

鬼塚かの足が止まり、「ここよ」と後ろを歩いていた俺の方へ振り向き、目の前にある建物を見ながら言った。

やっと着いたか……明日は恐らく筋肉痛だな。

H P が点滅している俺の前にあるアパートが鬼塚の自宅らしい。土曜日にお邪魔した、雨音のアパートよりも小さく、2階建のこのアパートの外見と同じアパートを他の場所で何回か見た事があるからして、安さが売りで全国展開している貸家会社の一つらしい。その証拠にアパートの前の看板はCMなどで聞き覚えのある名前だった。

2階の1番奥の部屋、204号室に案内され、玄関の扉を押さえている鬼塚に「とうぞ、入って」と鬼塚に促される。

俺は、お邪魔しますと一言言つて、中の部屋、外見から見たとおりワンルールの部屋へ行きやつと両手の重りを降ろす事が出来た。

よく此処までもつてくれた俺の両腕、褒めて上げたいくらいだ。家に帰ったらマッサージをしてやろう。

部屋に入つて1番驚いたのは、本の多さだ。自分と同じ身長程の本棚が二つ並んでいて、その本棚には、ピッチリと難しそうな表紙の本が並んでいる。本はそれだけでは無く、本棚の横に40冊程位はあるだろうか、10冊程の重ねられた山になって置かれていた。その山の隣に別として、漫画雑誌とライトノベル数冊が同じように重ねられ山になっていた。全体の本のきつと数パーセントしかないだろうその本達は、きつと息抜き用なんだろうと思った。

他には、ベッド、テレビ、棚が在り、部屋の中心にテーブルが置かれている、本棚が在るせいか少し狭く感じるが、他は至って普通の部屋だった。

「私の部屋を観察して、何か良いモノでも見つけたかしら？」

背後から聞こえた才力研部、部長の声。

「残念ね、ベランダに下着でも干しておけば良かったかしら」
振り向き様に俺は、

「誰もそんなの望んでねえよ！」

「勘違いしないで欲しいわ、残念なのは私よ」

「？　どういう意味だ。俺が下着を見れなくて残念だと馬鹿にしているのでは無かったのか？」

「下着を干しといて、それを見た愛田君が赤面し、慌てふためく様子を観察するチャンスだったのに」

根っからの研究者だった。しかも性質たちが悪い。

ここで引いたらこれから先、ずっと俺の弱点を突かれると思い、意を決して、

「鬼塚、お前は何か俺について色々と間違いを持っているぞ」

鬼塚はいつも通りの平坦な声で、

「間違い？　愛田君は、その年齢で在りえない程の純情のチェリーボーイなんですよ？」

その質問に俺は、顔を赤くしないように気を付けて、気を付けて、気を付けて――

「たっ、確かに、童貞なのは認める、でも、俺はそんな純情な訳じゃない、至って普通の感性を持った高校生であって――」

俺の話しの途中で、鬼塚は、

「あ、そうそう今日の荷物持ちのお礼をしないとね、でも私お金が余り無いから、体で払うわ」

そう言うと、鬼塚は薄ピンクのブラウスの首元に人差し指を掛け、ほどよく膨れた胸を俺に見せつけるかのように、扇情的なポーズをとる。

「なっ、な、何しているだよ、お前は――」

俺は後ろあった本棚に背中を張りつかせる。

顔が熱い、今の俺の顔は恥ずかしながら、真っ赤に完熟した林檍のようになっていることだろう。

鬼塚は平然と、

「何って、今日のお礼よ。嬉しく無いの？」

「お前に羞恥心というモノは無いのかあ!!」

人差し指を離し、女優モードにスイッチを入れる鬼塚は、
「わ、私も、は、初めてだから、電気は消してほしいわよ」

「何勝手に、話を進めているんだ！　そこまで行く前に羞恥心を
発動しろよ！」

鬼塚は女優モードを切って、

「だって私達友達でしょ？」

「そりゃ、そうだけどさ」

「確かフレンドは、こういう事をするってネットで見たわよ」

「そのフレンドは意味がちがあう！」

鬼塚はクスリと笑って、

「じゃあ、どういう意味なのかしら教えてくれる？　愛田君」

完璧に図られた。まさか此処まで計算しての今までのフリだった
のか。

「そつ、それは――」

言葉が詰まる、いや、俺が鬼塚を、女子を前にしてあの単語を口
に出来る筈も無かった。

完全に負けた。

完敗だ。

どう頑張っても、口で鬼塚に勝てないだろうと悟った。

俺はその場に体育座りをして顔を床に向ける。

「あら、どうしたの愛田君、耳まで真っ赤よ」

俺は、小さく純情で良いですと呟いた。

第46話 ファースフード

顔を下に向けた状態の体育座りから、顔を僅かに上げ部屋の壁に掛っていた時計に目をやると、ちょうど1時を回ったところだった。考えてみれば今日は朝から何も食べていなかった、休日は基本2食で済ましているが、今日は色々と行動をしたので平日以上のカロリーを消費した結果、腹の虫が疼いている。

俺の役目も終わった事だしぼち帰るとするか。

立ち上がった俺は鬼塚に、

「そろそろ俺帰るよ、お昼時だし」

そっけなく鬼塚は、

「そう。じゃあ気を付けてね」

靴を履き替えて、ドアを開け玄関から出ようとした時、後ろから声がして俺は振り向いた、

「愛田君、今日はありがとう。助かったし、楽しかったわ」

珍しく、何も企みの無いような笑顔。どうやら本当に楽しかったみたいだ。

「そりゃ良かったあそこまで散々言われて楽しく無かったって言われたら凹んでる所だよ」

鬼塚は、軽く笑って。

「また明日学校で、愛田君」

それを聞いた俺は、「ああ」と言つて、アパートを後にした。

鬼塚のアパートを出た俺は、歩きながらこれからどうしようかと考えていた。

さて、どうするか。家までは結構距離が在るし、来た時に見たバスの時刻表じゃしばらく待たないといけないみたいだしな。

「あつ、確かこの辺にハンバーガーショップが在ったな」

首謀者がピエロの世界に勢力を拡大しているハンバーガーショップ。高校生の大好きなファーストフード店。安くて速い。

「そこへ行って昼飯を食べるか」

俺は目的地を恐らく此処から十分程の距離にある大通りに面したハンバーガーショップに定め歩き始める。

大通り道へと出る為左右住宅で囲まれた車一台が通れるくらい幅の一方通行で歩道の無い道を歩いている。方向は大体分かってるのでなんとなくコッチの方へ出れば大通りに出るだろうという。大雑把な考えで進んでいるのだが、この道は細くて使い勝手が悪いのかどうか知らないが余り人通りの多い道では無い。さっき車一台と、犬の散歩をしている人を見かけただけで、おかしく思う位に寂しい道に感じていたが、曲がり角を曲がった、15メートル程離れた所で自動販売機と難しい顔で睨めっこをしている一人の少年が居た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4985z/>

時間が狂い出してから、俺の常識が壊れ始めました。

2012年1月8日21時46分発行